



反近代と反権力の詩学 : 雑誌『ピエロタ』 (母岩社・吟遊社) 解題と執筆者一覧

梶尾, 文武

(Citation)

神戸大学文学部紀要, 48:61-106

(Issue Date)

2021

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012689>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012689>



反近代と反権力の詩学

——雑誌『ピエロタ』（母岩社・吟遊社）解題と執筆者一覧——

梶 尾 文 武

1 総説

1・1 創刊前史

雑誌『ピエロタ』（6号までは『びえろた』と表記）は、1969年11月に母岩社から創刊された。20号（1973・6）まで編集を務めたのは母岩社の社主・緑川登である。この出版社の名は、緑川と親交のあった草野心平の詩集『母岩』（歷程社、1935・12）から採ったと見られる。ヨシダ・ヨシエの言葉を引けば、「ピエロタ」という誌名は「ある時期に会田綱雄氏の詩の核となった架空の、超現実の彼方にある美しい入江、あるいは海岸」¹の名に由来する。本誌は、会田を中心とする「詩と芸術」の雑誌として出発した。

会田綱雄の名が目次に確認されるのは、月刊誌と称していた11号（1971・4）までである。12号（1971・9）より季刊となり、次第に路線を転じた『ピエロタ』は、15号（1972・6）からは「文学と思想」という副題を戴いた。21号（1974・6）からは北村博率いる吟遊社に版元を移し、三島由紀夫を特集した23号（1975・4）をもって終刊する。

この間、緑川の編集による『思想史研究』（1974・10）が母岩社から刊行されたが、この雑誌は創刊号をもって頓挫したようである。『ピエロタ』の直接

1 ヨシダ・ヨシエ「超現実的蛇足の弁」（『びえろた』5号、1970・5）の付記にこの記述が見られる。

の後継誌と目されるのは、1975年9月に吟遊社より季刊文芸誌として創刊された『吟遊』である。また、1976年2月には、山崎行太郎、杉浦勢之らが同じく『ピエロタ』の名を戴く小雑誌を刊行しており、後記には「以前同名の商業誌を発行していた吟遊社より快諾を得て、同名ではあるが全く内容異質の新しい出立をしてゆくものである」²との断り書きが読まれる。本稿は、母岩社・吟遊社より刊行された『ピエロタ』全23号の解題である。本誌第47号（2020・3）に掲載されている総目次を、併せてご覧いただきたい。

母岩社による『ピエロタ』創刊までの経緯を追ってゆこう。その中心となった会田綱雄と緑川登の出会い、戦中にまで遡る。1940年末より中国に渡った会田は、「第十三軍に属する南京特務機関の、しがたない軍属」だったというが、南京政府の宣伝部顧問を務めていた草野心平のもとを訪ねた³。斎藤庸一が草野から聞いたところによれば、会田はその際に自作の詩「洪藍埠に行く歌」を携えており、感銘を受けた草野はそれを南京広播台のラジオ放送で朗読、改造社の『文芸』に推薦したという⁴。1942年11月、草野が中心となって日本語の文化研究雑誌『黄鳥』が創刊されると、会田もこの雑誌に参加した⁵。

1941年末、草野心平は、名取洋之助が上海共同租界香港路に創設した太平出版印刷公司・太平書局の顧問に招聘された⁶。会田綱雄が後年に書くところによれば、「太平印刷公司というのは、大戦勃発直後に派遣軍がアメリカから接収した施設を、そっくりそのままつかつて、鬼才として知られた報道写真家の名取洋之助が経営する、いま考えれば、まことにおかしい会社だった。出版局

2 「編集後録」（『ピエロタ』ピエロタ社、1976・2）、76頁、強調は原文。

3 会田綱雄「南京時代の心平さん」（『人物詩』1978・1、筑摩書房、73頁）。

4 斎藤庸一「戦争を生きた詩人たちⅠ」（沖積社、1997・12）、30-1頁。

5 『黄鳥 復刻版』（大橋毅彦・鈴木ひとみ解題、三人社、2018・12）を参照。また、草野を中心とする中国在住の文学者の動向については、大橋毅彦『昭和文学の上海体験』（勉誠出版、2017・3）第12章を参照。

6 名取を中心とした太平出版印刷公司の動向については、三神真彦『わがままいっばい名取洋之助』（筑摩書房、1988・4）第4章参照。同社から出版された単行本の一覧は、大澤理子「淪陥期、上海における日中文学の交流、史試論」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第9号、2006・4）で確認できる。

と印刷局とがあって、出版局のほうは、太平書局を名のっていた。草野心平さんが顧問として参与していた」⁷という。

名取は慶應義塾普通部で草野の後輩にあたる報道写真家であり、1933年より「日本工房」を率いたことで知られる。草野は編集者経験のある詩人・川鍋東策を太平出版印刷会社に招き、『新少年』や『女聲』といった雑誌の刊行にあたらせた。『女聲』の編集長を務めたのは、田村（佐藤）俊子である⁸。

草野と名取は1942年秋、同盟通信上海支局長の松方三郎とともに、孫文像の建設を計画した。その際、彼らが高村光太郎に銅像の制作を依頼すべく趣意書を託したのが、会田綱雄である。南京特務機関から一時帰国した会田は、この趣意書を携えて高村に面会したが断られ、計画は立ち消えとなる⁹。これを機に、会田は42年末より太平出版印刷公司に入社することになった。会田は当時を振り返って、次のように述べている。

緑川昇は、上海太平出版印刷公司にわたくしがはいったとき、わたくしより若かったけれども経理部長をしていたから、計数に明るい男だとばかり思いこんでいたが、その後つきあってみると、これくらい計数に暗い空想家はなかった。題名は忘れたが、戦前、エレガントな一冊の詩集を出している。彼の熱心なすすめで『鹹湖』を出そうかなという気にはなったものの、南京や上海で書いた作品を全部収録したものでなければ、わたくしとしては意味がなかった¹⁰。

7 会田綱雄「田村俊子さんのこと」（『人物詩』筑摩書房、1978・1、57頁）。三井直磨「上海の記憶」（『日本工房の会』編集委員会編『NIPPON先駆の青春』日本工房の会、1980・1、165-8頁）によれば、接収したのはイギリスの会社であり、会社名は「ミリントンプレス」という。

8 渡辺澄子「田村俊子の『女聲』について」（『文学』岩波書店、1988・3）、王紅「上海時代の田村俊子—中国語の雑誌『女聲』を中心に」（『中国女性史研究』1998・6）を参照。『女聲』掲載記事については、劉英順「田村俊子主宰『女聲』の総目次（翻訳）」（『国文目白』2004・2）を参照。

9 孫文像建設の一件については、会田綱雄「名取洋之助のこと」（『日本工房の会』編集委員会編『NIPPON先駆の青春』日本工房の会、1980・1、173-4頁）を参照。

10 会田綱雄「わが処女詩集『鹹湖』」（『現代詩手帖』1978・5）。後年に日本工房の関

上記の上海太平出版印刷公司経理部長・緑川昇とは、『ピエロタ』の刊行を支えた緑川登と同一人物と見るのが穏当だろう。資金繰りにたびたび行き詰まった『ピエロタ』での経験が、会田をして緑川を「計数に暗い」と評せしめたと考えられる。

会田は「一冊の詩集を出している」と述べるが、管見の限りでは、戦時期の緑川昇は1940年に『稗子抄』（構成社）、翌年に『青春哀歌』（構成社）という二冊の詩集を出しており、前者については伊藤信吉が書評「緑川昇「稗子抄」小感」（『蠟人形』1940・11）を著している。また、『日本詩壇』に掲載された「上海詩篇 墓標」（1941・6、7）や「中国の友を想ふ」（1941・10）は、緑川の上海体験を背景とした、愛国詩の性格が色濃い詩篇である。1941年には、緑川は、かねてから兄事していた川鍋東策とともに『季節』というタイトルの同人誌を発刊したという¹¹。

こうして会田と緑川は、戦中の上海で太平出版印刷公司の同僚として出会った。1944年7月、南京の草野心平が編輯兼発行者となって、『黄鳥』に続く日本語雑誌『亞細亞』が刊行された。この雑誌の印刷者は太平印刷出版公司、配給元は内山書店であり、会田と緑川、川鍋がそろって参加している¹²。

会田と緑川の交際は敗戦後、中国からの引揚げ後も続いた。川鍋東策は1947年5月、雑誌『花彫』を創刊した。創刊号では、会田は謄写を担当したほか詩篇を掲載、緑川は伊藤信吉とともにエッセイを執筆している¹³。さらに同年7月、草野心平を中心に『歷程』が復刊されると、会田はその第1号に「大

係者が編集した『NIPPON先駆の青春』（前掲）には、日本工房勤務者の一覧が掲載されており、会田・川鍋・緑川の名が確認される。

- 11 緑川昇「瘦せたソクラテス—詩人としての鍋さん」（『歷程』1970・2）。川鍋の死を受けての追悼文である。ここで緑川が言及する戦中の『季節』については、筆者は未見。
- 12 陳齡「戦時中の『亞細亞』と戦後の『新生』—「中支」に発行された二種の邦字誌を巡って」（『福岡女学院大学紀要福岡女学院大学国際キャリア学部編』2019・3）に、『亞細亞』創刊号および第2号の目次と解題がある。『亞細亞』については、筆者は未見。
- 13 緑川昇「瘦せたソクラテス—詩人としての鍋さん」（前掲）。ここに緑川が掲出した『花彫』第1号の内容紹介によれば、会田と川鍋のほかには堀田善衛・武田泰淳・岩井五郎・八代勝美・太田米寿が自作の詩を、吉田健一・神吉三郎・緑川当伎子・石川信雄が訳詞を、緑川と伊藤信吉がエッセイを掲載している。『花彫』については、筆者は未見。

工ヨセフ」他の詩作品を掲載、戦後詩壇に登場した。

緑川は、1950年代後半には、緑書房という出版社を経営していた。緑書房は、かつて緑川と川鍋が出したのと同名の同人誌『季節』（創刊号1956・10）を発行、当初の同人には草野心平や堀田善衛のほかに、高見順、金子光晴、堀田と同じく『批評』出身の伊藤信吉、山本健吉、神西清らが名を連ねた。緑書房は1956、57年頃には、『歷程』や『現代詩』といったメジャーな詩誌の版元となっており、発行人として緑川昇の名が確認される。緑川の慫慂により、会田綱雄が緑書房から第一詩集『鹹湖』を刊行したのも、1957年のことであった。翌年、会田はこの詩集により第1回高村光太郎賞（選考委員は草野心平・金子光晴・伊藤信吉・亀井勝一郎・尾崎喜八）を受賞した。

会田が囑託として勤務していた筑摩書房の同僚には、吉岡実がいた。五〇年代末、両者はともに伊達得夫率いる『ユリイカ』（書肆ユリイカ、1956・10～61・2）に作品を掲載するなど、詩人としての活動を共有した。批評家にしてキュレーターのヨシダ・ヨシエも、この伝説的詩誌の編集作業に携っていた時期があった。会田を中心とした初期『ピエロタ』の方向性は、ヨシダによって決定づけられることになるのである。

1・2 詩誌として

会田綱雄と草野心平の繋がりが深かったことから、『ピエロタ』には草野を筆頭に『歷程』周辺の詩人や詩論家が多く名を連ねている。岡崎清一郎、鳥見迅彦、伊藤新吉、黒田三郎、本郷隆、長光太、宗左近といったベテランから、日高てる、金井直、高内壮介、嶋岡晨、財部鳥子、吉原幸子、吉行理恵といった中堅若手まで、本誌は『歷程』周辺の詩人や詩論家を多く書き手に迎えた。また、詩風と人脈が『歷程』と多く重なる詩誌『日本未来派』の出身詩人からは、及川均、上林猷夫、寺門仁らが『ピエロタ』に作品を寄せている。

『歷程』と並んで本誌との結びつきが強いメジャー同人誌として挙げられるのが、『同時代』（黒の会、1955・12～93・1）である。会田は『同時代』に

は何度か寄稿しており、同誌主宰者の宇佐見英治、同人である宗左近、吉原幸子、日高てる、高内壮介らの他、『同時代』の執筆陣からは、山口三夫、金井直、知念栄喜らが本誌に寄稿した。

会田綱雄が私淑した詩人に、金子光晴がいる。前述のとおり、金子は緑川が手がけた戦後版『季節』の創刊時からの同人であり、緑書房が版元として離れた後、第7号（1957・10）から会田も本誌に加わった。『ピエロタ』は、金子光晴を中心とした詩人のグループを迎えた。その一人である上杉浩子は『金子光晴の思い出』（構想社、1978・6）のなかで、金子光晴と田村隆一の対談を実現させた際のことを振り返り、次のように証言している。

田村隆一さんと金子先生とが対談したのは私たちのアパートでだった。「ピエロタ」の編集を一時期、新谷が会田綱雄さんに依頼されて手伝っていた。この雑誌がその後、半年ほどで中断したのは資金不足からである¹⁴。

田村隆一は、『ピエロタ』誌上で創刊以来三回にわたって対談のホストを務めており、金子光晴との対談はその第二回にあたる。田村は、本誌とほぼ同時期に創刊された雑誌『都市』（都市出版社、1969・12～72・4）の編集を担っていた¹⁵。両誌の間には執筆者相互の乗り入れが見られ、会田綱雄のほか、財部鳥子、渋谷孝輔、栗津則雄、鍵谷幸信、伊東守男、飯村隆彦、岡田隆彦、ヨシダ・ヨシエといった書き手が双方に執筆した。

上杉浩子の証言によれば、金子光晴の門人である新谷行は、初期『ピエロタ』の編集作業にも携わったようである。新谷は上杉の夫であり、詩人にしてアイヌ研究者としても知られる。新谷夫妻と金子との関わりは1957年にはじまる。1959年10月、新谷が桜井滋人、竹川弘太郎、佐藤久夫らとともに同人詩誌『詩

¹⁴ 上杉浩子『金子光晴の思い出』（前掲）、196・7頁。

¹⁵ 拙稿「文学的都市論の起源—雑誌『都市』（都市出版社）解題と総目次」（『神戸大学文学部紀要』2018・3）を参照。

域』を刊行すると、金子はこの雑誌に小文「雑感」を寄せた。その後継誌が『あいなめ』（あいなめ会、1964・8～75・12）である。詩集『愛情69』（筑摩書房、1968・10）所収の連作が掲載されたほか、松本亮によるインタビュー「あいなめ談義」が掲載され、のちにマスコミへの露出を増すきっかけとなるなど、金子の晩年を語る上で『あいなめ』は欠かせない。会田綱雄も11号（1966・6）に詩作品「trush」を寄稿した。こうして前期『ピエロタ』の執筆陣の一角は、上杉、新谷、桜井のほか、横川礼子、梅田智江など「あいなめ会」の面々が占めた。詩誌『コスモス』以来金子の盟友である秋山清も、『ピエロタ』の重要な参加者のひとりであり、後半期まで寄稿している。

『ピエロタ』は創刊以来、読者から詩の投稿を募り、選ばれた作品は「新人詩」として掲載された。選出にあたったのは、会田綱雄（1～3回）のほか、財部鳥子（1～6、8回）と江森国友（4～7、9回）である。

少女時代に中国東北部からの引揚げを体験した財部鳥子は、メジャー詩誌『詩学』が設けた「詩学研究会」を経て、詩集『わたしが子供だったころ』（私家版、1965）で詩壇にデビューした。終刊が予定されていた第三次『地球』の復刊第1号（42号、1966・10）の巻頭を飾ったのは、財部の作品である。この復刊号の編集の中心を担った斎藤庸一には、会田綱雄と共同で『歷程』の編集を手がけた時期があった¹⁶。

財部は、『ピエロタ』と近い時期に刊行された詩誌『青素』（構造社、1969・4～70・6）の主力詩人でもある。第三次『地球』および『青素』の詩人と『ピエロタ』の結びつきは強い。創刊号から詩論を連載した嶋岡晨や、鶴岡善久、小川和佑、杉本春生、安西均、白石かずこ、新川和江といった面々は『地球』にも執筆の場を持った。また、『青素』（10号、1970・5）が小特集を組んだ阿久根靖夫は、村上一郎や桶谷秀昭と同人誌『無名鬼』（1964・10～75・10）で活動をともした詩人であり、『ピエロタ』では吉田松陰論を連載している。

16 斎藤庸一『戦争を生きた詩人たち I』前掲、15-16頁。

財部と同時期に『地球』『青素』を拠点として活動し、『ピエロタ』にも作品を寄せた詩人に、会田千衣子がいる。会田は財部より詩人としてのデビューは早く、1960年に岡田隆彦が復刊した『三田詩人』（第2期）に吉増剛造らと加わった後、岡田・吉増らと詩誌『ドラムカン』（1962・7～69・9）を創刊している。また会田は、和田徹三率いる『灣』（1956・1～?）の主力同人であり、その同人である黒部節子・星野徹は『ピエロタ』にも寄稿した¹⁷。

財部鳥子とともに『ピエロタ』新人詩の選考を担った江森国友は、『三田詩人』（第1期）および『三田文学』の出身で会田千衣子の先輩にあたる詩人である¹⁸。江森が1954年に堀川正美や三木卓らと創刊した『汜』（全19号、1954・4～72・3）は、戦後詩第二世代の出現を画する詩誌として知られる。江森と『ピエロタ』との結びつきは強く、第一詩集『宝篋と花讃』の版元は母岩社、第二詩集『慰める者』の版元は吟遊社である。

本誌には、江森国友を中心とする詩壇の人脈、とくに『三田詩人』周辺の詩人や詩論家の多くが名を連ねている。わけても『三田詩人』出身の安宅夏夫は、母岩社から詩集『火の舞踏』（1972・1）を刊行した本誌の常連執筆者だが、望月昶孝と郷原宏の詩誌『長帽子』（1963・5～）にも加わっていた詩論家である。安宅のほか、『長帽子』と『ピエロタ』の双方に加わった詩人には、高橋秀一郎・花井純一郎・橋本真理の名が挙げられる。そもそも『長帽子』は前述の『青素』と強い紐帯を有し、のちに吟遊社を立ちあげた北村博が1971年に復刊された『青素』創始号を編集した際には『長帽子』を特集した¹⁹。

本誌が「詩と芸術」の雑誌から「思想」の雑誌へと性格を変えていった時期、遅ればせながら13号から参加した佃学も、江森国友と親しい間柄にあった詩人である²⁰。母岩社刊行の第一詩集『不眠の草稿』（1971・6）には、江森が跋

17 和田徹三編『『灣』の詩と詩人』（沖積舎、1990・10）

18 和田徹三編『『灣』の詩と詩人』（前掲）には、江森による「会田千衣子論」が掲載されている。

19 『ピエロタ』12号には、『青素』創始号の広告が掲載されている（47頁）。なおこの「創始号」には、江森国友と財部鳥子の対談が掲載されている。

20 佃学の詩論集『詩と献身』（レアリテの会、1982・3）には、「江森國友試論」が収

文を寄せている。第二詩集『劇中劇』（1973・3）と第四詩集『海景』（1978・3、跋はヨシダ・ヨシエによる）はいずれも母岩社から刊行されており、緑川登が佃にいかに厚い信頼を寄せていたかが窺われる。

1・3 芸術誌から思想誌へ

前衛芸術誌としての性格を色濃く備えた前半期の『ピエロタ』において、アーティストや美術批評家たちの求心力となったと目される存在が、ヨシダ・ヨシエ（本名吉田早苗）である。同時代の前衛シーンにあつて、ヨシダは「自らパフォーマンスやイベントの企画者（＝キュレーター）として、一種のオルタナティブ・スペースを運営し、幅広いジャンルをカバーしながら、実践と評論の両方でパフォーマーたちに熱い共感を寄せた唯一の評論家」²¹と今日では評される。補って言えば、瀧口修造を入口として日本のシュルレアリスム文学の展開に通暁する詩論家でもあった。神田神保町の昭森社で森谷均に編集技術を学び、同じビルの書肆ユリイカで『ユリイカ』の編集を手伝っていた時期もある²²。詩人と前衛芸術家の双方に広い人脈を持つヨシダは、「詩と芸術」の雑誌としての本誌前半期を支えた。

遡っておけば、ヨシダのキュレーターとしての活動は、1951年末から日本各地で丸木位里・赤松俊子夫妻の作である「原爆の図」巡回展を開催したことに始まる²³。1960年には、日本大学芸術学部映画研究会を母体として「VAN映画科学研究所」が設立されると、ヨシダも荻窪の天沼陸橋下を根城としたこの

録されている。佃の文業は『佃学全作品』（全3巻、田端書店、2018・6）で一望できる。

21 黒ダライ児『肉体のアナーキズム—1960年代・日本美術におけるパフォーマンスの地下水脈』（grambooks、2010・9、44頁）。60年代におけるヨシダの動向については、本書第1部第2章を参照。

22 「ヨシダ・ヨシエ オーラルヒストリー—2010年1月27日」（インタビューア—光田由里・中嶋泉）におけるヨシダの発言による（『日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ』http://www.oralarthistory.org/archives/yoshida_yoshie/interview_02.php）。なお、『ユリイカ』を発行した伊達得夫率いる書肆ユリイカは、昭森社ビルの二階に編集室を構えていた。伊達得夫『詩人たち—ユリイカ抄』（日本エディタースクール出版部、1971・7）を参照。

23 小沢節子『「原爆の図」—描かれた〈記憶〉、語られた〈絵画〉』（岩波書店、2002・7）第三章、岡村幸宜『「原爆の図」全国巡回展の軌跡』（『原爆文学研究』2009・12）を参照。

組織に加わり、赤瀬川原平、中西夏之、足立正生、川仁宏、オノ・ヨーコや、飯村隆彦、羽永光利らと交流を持った。なお、VANの活動は、1965年から翌年にかけてヨシダが運営し、加藤好弘ら「ゼロ次元」のパフォーマンスを東京で初めて取り上げたことで知られる「モダン・アート・センター・オブ・ジャパン（MACJ）」の活動、さらに赤瀬川源平のいわゆる「千円札裁判」の法廷闘争に繋がってゆく²⁴。

ヨシダの初期詩論のなかでは、「途絶えた系譜」（『美術批評』1957・1）が注目される。前年に刊行された壺井繁治の詩集『頭の中の兵士』を論ずる。この書評が掲載された当時の『美術批評』は、武井昭夫と吉本隆明が同時代に喚起した「文学者の戦争責任」論の発信源のひとつだった²⁵。すでに吉本は壺井に注目し、ダダイストとして出発しながら愛国詩に転じ、戦後は民主主義者としてふるまったこの詩人（および岡本潤）の戦争責任を「内部の世界」の論理化という契機の欠如として論じていた²⁶。ヨシダはこうした吉本の議論を暗に踏まえつつ壺井の詩をより丁寧にとどり、戦争の時代の壺井が「内部の暗黒を一層深く掘り起こすことを放棄し」たことを批判、「日本アヴァンギャルド運動の先駆者達の遺産」を再検討することを批評上の課題として設定した。なお、ここでヨシダが検討した壺井の詩集『頭の中の兵士』の版元は、緑川昇の緑書房である。

ヨシダの詩論家としての名を高からしめた「瀧口修造覚え書」（『現代美術』1961・6～9）は、こうした問題意識に立脚する。この評論は、安部公房を編集人に載く「記録芸術の会」の機関誌『現代芸術』（勁草書房）に、東野芳明の仲介を経て掲載された²⁷。1941年の「シュルレアリスム事件」に照準しつつ

24 60年代におけるヨシダの動向については、ヨシダ・ヨシエ『解体劇の幕降りて—60年代前衛美術史』（造形社、1982・1）を参照。なお本書の装丁は赤瀬川源平による。

25 吉本隆明・武井昭夫『文学者の戦争責任』（淡路書房、1956・9）所収の武井論文四編のうち三編は、『美術批評』を初出誌としている。

26 吉本隆明「前世代の詩人たち」（『詩学』1955・11→吉本隆明・武井昭夫『文学者の戦争責任』前掲）

27 掲載の経緯については、「ヨシダ・ヨシエ オーラルヒストリー2009年12月9日」

権力と芸術の関係を問い、中野重治が賞賛したこの評論は²⁸、『瀧口修造コレクション』別巻（みすず書房、1998・7）に収録されたアンソロジー「瀧口修造研究」の劈頭を飾る。本格的な日本アヴァンギャルド芸術運動史論の嚆矢と言えよう。その執筆に際し瀧口の知己を得たヨシダは、鶴岡善久をはじめとする詩人・詩論家や、土方巽を中心とする前衛舞蹈家など、瀧口の周辺の人脈と繋がっていった。かくて瀧口こそが、「反権力」としての芸術の探究という『ピエロタ』の理念を体現する存在として戴かれた。

1970年9月、鶴岡善久の編集により母岩社から『富士原清一詩集 魔法書或は我が祖先の宇宙学』が刊行された。ヨシダは「一九七〇年になって、鶴岡善久により富士原の限定百部の詩集が上梓され、刊行した母岩社の依頼で、わたしはオリジナル・エッチングを深沢幸雄、装画を高橋安子に頼んで制作のお手伝いをしたことがある」²⁹と証言している。ヨシダと鶴岡・瀧口が、母岩社という場で協働していたことを物語っている。高橋安子は、『ピエロタ』でもたびたび表紙イラストや挿画を手掛けた画家であった。このようなヨシダの求心力によって、本誌は多くのアーティストが集う芸術誌としての性格を得た。

しかし、ヨシダの名を本誌に見ることができるのは、7号までである。会田綱雄は11号、財部鳥子は15号をもって本誌への寄稿を終えた。吉本隆明を特集した13号の「編集後記」では、緑川登は「これからは、本号の特集を契機に、いっそう思想的側面から、内面の論理化としての文学の構築に資するような主題を採り上げていきたい」と述べ、本誌の性格を思想誌へと塗り替えていくこ

（インタビュー＝光田由里・中嶋泉）におけるヨシダの発言を参照（『日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイブ』http://www.oralarthistory.org/archives/yoshida_yoshie/interview_01.php、2018・6・7更新）

28 中野の評言は以下。「へつぱり腰ながらも、当時の諸条件のなかで何とかかとか努力した、そしてしばしば潰えて行つた人びとの努力を今日リアライズする必要がある。ヨシダ・ヨシエの「滝口修造覚え書」（『現代藝術』八月号）などもその点で貴重なものを教えている。私としては、私は美術の方のこういう事情に全く暗いまま来ていた」（「プライベートシーと「せいび」―途中の問題（八）」『新潮』1961・9→『中野重治全集 第24巻』筑摩書房、1977・9、100頁）。

29 ヨシダ・ヨシエ「瀧口修造と土方巽が接しあうトボス」（『舞踊学』24号、2001）

とを予告した。

同じく13号の目次裏には、同年に現代評論社より刊行された対談集『戦後思想家論』の広告が掲載されている。本書は、同社刊行の言論誌『現代の眼』（現代評論社、1970・8）の特集「戦後とは何か—思想家論による試み」を増補し書籍化したものである。『ピエロタ』はこの頃より『現代の眼』『流動』といったいわゆる左翼総会屋雑誌を活動拠点としていた評論家たちを多く書き手に迎えていった。松本健一、菅孝行、後藤総一郎、菊地昌典、谷川健一、綱沢満昭、岡庭昇といった面々である。

なかでも松本健一は、法政大学の修士課程在籍中（指導教員は小田切秀雄）の1970年から『現代の眼』に進出し、71年に版元の現代評論社から『若き北一輝—恋と詩歌と革命と』を上梓するなど、左翼総会屋雑誌の申し子というべき若き評論家であった。14号（1972・3）より『ピエロタ』に加わった松本は、1975年に著した一文で、このように言及している。「『ピエロタ』は折りからの紙不足や物価高の直撃をくらい、廃刊になってしまった（現在刊行されている同誌は、所有者・編集者を異にする）。じぶんの文章がのっていたからというわけではないが、なかなか面白い雑誌だったのに、惜しいことをしたとおもう」³⁰。松本が本誌執筆に力を入れていたことを物語る証言である。松本は、母岩社からの最後の刊行となった20号で、本誌はいったん「廃刊」されたと認識していた。

加えて後期『ピエロタ』には、吉本隆明と強い紐帯をもつ「自立派」の批評家の多くが合流した。北川透、村上一郎、桶谷秀昭、滝村隆一、岡田啓、河野信子らがそれである。本誌に初期から加わった内村剛介も、吉本が主宰する『試行』の出身であった。さらに、平岡敏夫、三枝康高、大久保典夫といった、明治期もしくは昭和期のロマン主義文学を専門とする研究者も本誌に参入し、本誌に文学研究誌的な性格を与えた。上記の平岡、桶谷、綱沢のほか、判沢弘、綱沢満昭、伊谷隆一、しまね・きよし、木下長宏といった後期『ピエロタ』の

30 松本健一「あとがき」（『ドストエフスキイと日本人』朝日選書、1975・5、252頁）

執筆者は、前後にこぞって紀伊國屋書店より新書を刊行した。その編集部に村上一郎がいたことに鑑みても、緑川登が自立派周辺の人脈に注目していたことはまぎれもない。

後半期の『ピエロタ』では、特集の分量がかつてよりも大幅に増し、既発表論文の再掲が目立つようになる。特集末尾には関連年譜や参考文献一覧も付された。同人詩誌の集合体の様相を呈したかつての誌面構成からは一転し、各号ごとに設定された思想的主題に関するムックとしての性格を強めたと言える。専ら主題とされたのは、ナショナリズムあるいは土着的なものとの関係である。いわゆる「反近代」が、文芸批評の場では六〇年代より自立派を中心に展開されてきた主題であることは再論を要さない³¹。15号より副題を「文学と思想」と改めた後期の『ピエロタ』は、多様なマイナー詩誌とアングラ芸術に光を当てたかつての構成から転じ、自立派の影響の色濃い雑誌群のひとつとなった。

この間、緑川登は本誌の編集後記で北村透谷や吉田松陰の魅力に熱っぽく語ったが、出版人として『ピエロタ』を手放した後は、先述の雑誌『思想史研究』を刊行、特集「鎌倉仏教・乱世の変革思想」を組んでいる。また、書き手としては、明和事件(1767年)で刑死し、松陰ら幕末思想家にも影響の大きかった尊王思想の鼓吹者・山県大弐の研究に取り組んだ。当時の緑川の論文「新懇の歌—山県大弐試論」は、千々和久幸率いる福岡発の同人誌である『砦』に連載されている(1974・4~75・11)³²。さらに緑川は1978年8月、佃と千々和とともに『邯鄲』を創刊した。「邯鄲叢書」の一冊として刊行された『墓の花—愛と死への彷徨』(邯鄲舎、1980・10)が、管見の限り、緑川の唯一の随筆集である。芸術から思想へという本誌の方向転換は、緑川自身の関心の移ろいよるところが大きい。以下、各号の解題を試みたい。

31 拙稿「詩的言語と国家の原理—吉本隆明と自立派の詩学的批評」(『昭和文学研究』2018・9)を参照。

32 千々和は『ピエロタ』には参加していないが、1973年に詩集『八月媛縁者之道行』を母岩社から刊行している。

2 各号解題

■ 1号（1969年11月、副題「詩と絵を愛するひとの」）

表紙写真は、本誌に登場する前衛美術家たちと繋がり深い奈良原一高による（2号まで）。巻頭を飾るのは辻まことと山本太郎の画と文。「花と詩のインテリア」は、加藤千恵のフラワーデザインに江森国友・吉行理恵・会田千衣子が詩文を沿えた作品の写真である。

日向あき子の評論「芸術とエロスと」は、福地靖のペン画「記憶のなかのファニー」を扉に添え、古今の芸術におけるエロティシズムの問題を論ずる。後の著書『ニューエロティシズム宣言』（荒地出版社、1970・6）のエスキースと見られる。モディリアニを中心に論じた宇佐見英治「裸婦」とあわせて、日向の評論は、エロティシズムと芸術の関係を主題に押し出した『ピエロタ』初期の問題意識を方向づけたと言えよう。

財部鳥子「立原道造の詩」は、立原の詩業をその生い立ちに照して読み直しつつ、『少女の友』に掲載されていた「のちのおもひに」に触れた際の感動を、自身の戦争体験・引揚げ体験と重ねながら語るエッセイである。

詩作品と作品鑑賞・詩人評を併載したのも、本誌の特徴である。この企画からは同時代に群生する同人詩誌の人的ネッ

トワークが窺える。創刊号に掲載されたのは茨木のり子（三好豊一郎）、吉増剛造（江森国友、カッコ内は評者）など。金子光晴も顔写真と自身の顔についてのエッセイシリーズ「顔」で、創刊号から本誌に参加している。自作の画と文のシリーズ「私の町」では、岡崎清一郎が足利を、日高てるが大和高田を描き、一文を付す。吉原幸子「詞」と「詩」は、審査員として出演したNHKのテレビ番組「あなたのメロディー」をめぐるエッセイである。

創刊に伴って、草野心平の「ハワイ通信」をはじめとする絵と小文の他に、評論や対談の連載が開始されている。ロマン・ロランの翻訳者として知られる、『同時代』周辺の仏文学者・山口三夫の「わが詩人たちの肖像」（2回、2号まで）は、チリの国民的女性詩人ガブリエラ・ミストラルとフランスのトロキスト詩人マルセル・マルチネを論ずる。嶋岡晨「日本の抒情詩」（6回、6号まで、→『現代詩のエチュード』右文書院、1975・11）は、勝海舟の「思いやつれし君」にまで遡って近代日本の抒情詩の起源を探り、花袋・藤村、明星派から露風までをたどる明治詩史論。

田村隆一の連続対談は、一回目のゲストに写真家の福島晶子を迎えた。テーマは「ヌード」。本誌掲載のプロフィールによれば、福島は『現代の眼』『プレイボーイ』『女性自身』等に作品を発表したほか、天井棧敷の演劇作品にも出演し

たことがあるという。

前川佳子の連載「楽しく絵を描きましょう」（3回まで）は、デッサンの方法を手ほどきする文章。会田綱雄は前川の個展に足繁く通っており、同時期にエッセイ「前川佳子あるいは美女の怪力」（『同時代』1969・10→『人物詩』前掲）を著している。この企画は、本誌が批評に関心を持つだけでなく、絵画の実作を志す層を読者として想定していたことを示していよう。緑川登が記した「編集後記」には、以下のような一文がある。

本誌は、詩をコアとして、今日の課題に應えるささやかな芸術詩として誕生しました。これからは、音楽・映像芸術の周辺をはじめ他の芸術ジャンルをも、詩とのかかわりあいから掘り下げ、内容をいっそう豊かにするとともに、ビジュアルで楽しく、また問題を提起する骨のある芸術総合雑誌に育てていきたいと思っております。

■2号（1969年12月、副題「詩と芸術の総合誌」）

創刊号の緑川による「編集後記」のマニフェストに対応するようにして、本誌は今号から「詩と芸術の総合誌」という副題を戴いた。特集は「詩と絵のあいだ」。巻頭論文は栗津則雄「詩的言語と絵画的言語の崩壊過程—エルンストと

ゴッホの場合」である。絵画批評を詩の形式で行なったボードレールから説き起こし、ランボオが目指していた解体の運動を絵画の側から徹底したエルンスト、散文的スタイルを詩にまで高めたアルトーの「ゴッホ論」を論ずる。

ヨシダ・ヨシエ「ことばとイメージの空間」は、前半は中村宏と瑛九、後半はハプニングを対象に論じた現代芸術批評。詩と絵画、あるいは彫刻、演劇、音楽、映画という区分けが無用となりつつある「芸術ジャンルの溶解現象」に注目し、その先駆として瀧口修造や『ユリイカ』詩画展（1958年）を想起する。江森国友「現代美術と〈言語表現〉」は、菅井及の作品に言及しつつ環境芸術の出現を論じ、人間と自然との連環を探る現代科学が、自然と対抗するのではなくむしろ自然に帰依するかたちに添いつつあることに注目を促す。

本号掲載のその他の評論は以下。滝口雅子「愛の詩人・室生犀星」（→『わがころの詩人たち』彌生書房、1971・10）は、軽井沢の犀星文学碑を訪ねたときのことを振り返りつつ、詩作品をとおして人間を愛し生活を大切に詩人に思いを寄せる。岡本雅美の「'69バリケードフォークロア」は、東大闘争に加わった者の言語表現として構内の立看板、ピラの落書の類を紹介する。当時東大農学部で助手を務めていた岡本は、ら直前に村尾行一との共著『大学ゲリラの唄—落

書東大闘争』（三省堂新書、1969・5）を刊行しており、本稿はその紹介を兼ねる。

本号に詩作品が掲載されている詩人とその評者は四組。上杉浩子の詩を評するのは金子光晴である。金子ら『あいなめ』周辺の人びとが本誌の編集に一役買ったことはすでに見たが、ここで金子は上杉の作品を「たいへんうつくしい」と手放して絶賛している。

本号では米ソの詩が紹介されている。ハロルド・ライトの評論「アメリカ現代詩の展望」は、1950年代におけるビート詩人、60年代におけるヒッピー、リロイ・ジョーンズに代表される黒人詩を論じ、アメリカ現代詩の展開を概観する。なおライトはドナルド・キーンに師事した日本学者であり、『明治天皇御製』の英訳を2017年に完成させたことで知られる³³。また、内村剛介が「現代ソ連詩選」としてロシア語詩を訳出、解説を付している。石原吉郎「じゃがいものそうだん」は、童画風の自筆作品に詩文を付す。『ピエロタ』には石原とその周辺の詩人も加わっていることが注目される。

■ 3号（1970年2月、副題「詩と芸術の総合詩」）

巻頭には、まさのり・おおえの映像詩

33 『読売新聞』（夕刊、2018・1・15）に掲載された記事「明治天皇の心触れ30年」を参照。

集『幻覚共同体』（私家版、1970）の紹介記事が掲載されている。1965年に渡米したおおえは、LSDによる人格変容（サイケデリック・レボリューション）に傾倒し、「イッピー」に共鳴しつつアンダーグラウンド映画を製作した映像作家である。69年に帰国した後、『映画評論』の佐藤重臣らとともに京大西部講堂や大阪城反博会場でサイケ映画の上演活動を行ない、写真家の中平卓馬、映像作家で批評家の金坂健二とともに「ニューズリール・ジャパン」を発足する。この間、おおえは加藤好弘らゼロ次元の映画『いなばの白うさぎ』の撮影を担当しており³⁴、アンダーグラウンド映画とサイケデリック・アートの急先鋒として金坂と並び称される存在となっていた³⁵。

同じく1969年の暮れ、ヨシダは万博問題をめぐる討論会を企画し、その会合の場に池田龍雄、桂川寛、馬場彬とともに、金坂健二、加藤好弘、おおえまさを招いた³⁶。本号がおおえを大きく取り上げたのも、ヨシダの采配であろう。

特集「70年情況のなかの詩と芸術」は、三木卓とヨシダ・ヨシエの評論で構

34 おおえまさのり『魂のアヴァンギャルド—もう一つの60年代』（街から舎、2013・10）第1部を参照。

35 この時期の金坂健二のテクストは、『幻覚の共和国』（晶文社、1971・2）に集成されている。

36 ヨシダ・ヨシエ『解体劇の幕降り—60年代前衛美術史』前掲、181頁。

成される。三木卓「一種無残な口惜しさ——詩に何が問われるべきか」（→『詩の言葉・詩の時代』晶文社、1971・5）では、左足が不自由な三木が「差別」の問題を問う記述が読まれる。ヨシダ・ヨシエ「芸術家みずからに告発の眼を」は、古沢岩美『エロチコ』のパンフレット押収事件、赤瀬川原平の模型千円札事件等、権力による表現弾圧事件を取り上げ、多くの芸術家が権力に対する明察を欠いていることを批判する。あわせて本号巻頭には「エロチコ」の一部が掲載されているが、古沢は折に触れて瀧口と活動をともした画家である³⁷。

特集と連載のほかにエッセイが三編。長光太「宮沢賢治—「雨ニモマケズ」・修羅のむせび」には、伊藤信吉が撮影した賢治ゆかりの地の写真が添えられている。宇佐見英治「詩人の国」は、セザンヌ、リルケ、ヘッセに触れ、「詩人」あるいは「芸術家」の存在条件を問う。このエッセイは連載が予告されているが、実現し

37 1971年2月に渋谷東急文化会館で個展が開催された際には、「幻想美の中に社会的関心—日本のダリ、古沢岩美展」とタイトルを打った次のような新聞記事が出ている。「さしえ界の〴〵エロ。作家のような印象があっても、実際はちがう。日本の洋画壇には珍しい徹底したシュールリアリストであり、かなり以前から前記の三島由紀夫をはじめ、開高健、井上光晴など文壇人に支持されてきた」（『読売新聞』夕刊、1971・2・10、5面）

なかったようである。

白石かずこ「詩とジャズの接点」は、アレン・ギンズバーグらいわゆるビート派に影響された詩人たちが雑誌『Doin'』（1962・7～65・10）を拠点にジャズ演奏をバックに詩の朗読を試みた当時を回想する³⁸。このエッセイは、「JAZZに知らない顔をして、現在の詩なんて考えられない」という白石の詩人としての立場を告げている。

西脇順三郎「ロマンティック風景」と原精一「不詳の子」は、いずれも自作の絵に短い自作解説を付す。連続企画「私の町」に絵と文を寄せたのは、画家・漫画家で詩人でもあった八木義之介。また、本号から、伊藤信吉「旅の手帖」の連載（5回、8号まで）が始まっている。この連載は伊藤自身が撮影した文学ゆかりの地の写真に随筆を添えたものであり、写真の一部は『詩の旅』（彌生書房、1972・3）に収められている。

本号に詩作品が掲載されている詩人とその評者は六組。新谷行の作品を『あいなめ』の同人桜井滋人が鑑賞している。高内壮介は、栃木発の『鴉群』（1946年創刊）以来³⁹、『歷程』等を通して活動を

38 『Doin'』の詩人たちにおけるビート派の影響については、新倉俊一「灰と火花—アメリカ詩と日本の現代詩」（『アメリカ研究』1973・7）が考察を加えている。

39 高内壮介、岡崎清一郎や小川和佑を含む栃木県出身の戦後詩人たちの活動については、小林猛雄『私の戦後詩—

ともにしていた岡崎清一郎を評する（→「岡崎さんの詩」『現代詩人論』落合書店、1975・10）。

本号から、会田綱雄と財部鳥子の選考による「新人詩」の掲載が開始された。翻訳詩としては、鍵谷幸信の訳によるW・C・ウィリアムズ「雨」が解説を添えて掲載されている。また、内村剛介「アンチ・ユートピアの情念」は、ドロフェンコの詩「クリミヤの夜」を訳出しつつ論じた評論である。

総説でも触れたが、田村隆一の連続対談第二回のゲストは金子光晴、テーマは「エロス」。冒頭にウィスキーの瓶をはさんで田村と金子が対峙する写真が掲載されているが、この対談は新谷行・上杉浩子夫妻のアパートで行われた。現場では耳が遠くなった金子の応答が少々しくなく、新谷は「ちきしょう、緑川さんが酒を飲ませるからだ」と立腹したという⁴⁰。

■ 4号（1970年4月、副題「詩と芸術の総合誌」）

本号の特集は「想像力の根源」^{ラジカル}。巻頭には「錯誤70—私と状況の距離の中で」として、高橋安子・馬場彬・三好敏弘の三者の作品が掲出され、サトウ画廊をマ

あまりに自伝的な栃木県詩壇50年史』（条件グループ、1997・12）を参照。

40 この対談の経緯については、上杉浩子『金子光晴の思い出』（前掲）、196-202頁に詳しい。

ネジメントしていた馬場が一文を付す。前述の、ヨシダが催した万博問題をめぐる討論会のための会合には、馬場も参加していた⁴¹。この一文によれば、大阪万博に対する「皮肉」として、馬場を中心に「環境ゲーム審議会」展が開催され、池田龍雄や豊島弘尚が参加した。さらに、万博開催の70年にグループ連鎖展として開催されたのが「錯誤70」であり、馬場はこの展覧会の終了後に先の「審議会」のメンバーを交えて「70年と私を考える実行委員会」を結成した。当時さまざまに展開された、芸術運動としての万博反対運動の一コマである。なお、本号の「私の街」では、豊島弘尚が故郷八戸を描く。

岡田隆彦「未知の全体を孕むちから」（→『幻影の現実のゆくえ』田畑書店、1970・12）は、現代を想像力の行使が差し止められた時代と捉え、脱出口をブルトンに見出しつつ「未知の全体を孕むちからとしての想像力」の復権を説く。岡田が詩誌『ドラムカン』出身の詩人であることはすでに見たが、六〇年代末には中平卓馬、高梨豊、多木浩二らと写真同人誌『プロヴォーク』（1968・11～69・8）を刊行し、芸術批評の第一線で活躍していた。

読み切りの評論は三編。このうち赤塚行雄「苦痛の想像力—赤瀬川原平の近作「干渉稿」」は、千円札裁判を念頭に赤瀬

41 ヨシダ・ヨシエ『解体劇の幕降りて—60年代前衛美術史』前掲、181頁。

川の最近作を読み解く。会田綱雄「自己流謫ということ—高村光太郎ノート」は、詩篇「ブランデンブルク」における「自己流謫」の語に着目し、これを文学者の戦争責任の追及が進むなかで「贖罪」を欠いた光太郎の「護符」と読む。戦中に高村に傾倒した会田が、この詩人の戦後責任を問う評論として注目される。

また、本号より羽永光利の連載評論「体制裏の芸術家」が始まっている（3回、6号まで）。羽永は写真家として、土方巽、磨赤児、芦川羊子、田中泯らの舞踏、状況劇場や天井棧敷の演劇、ハイレッドセンターの芸術活動等、数多くの同時代の前衛・アングラの牽引者を被写体とした。「VAN映画科学研究所」の活動以来、羽永をよく知るヨシダ・ヨシエによれば、「アンダーグラウンドの底辺にカメラ・アイを潜入させ、一方では記録的な仕事にたずさわりつつ、水俣病などの撮影体験から、呪殺祈禱団などの接触、左道密教への関心などから、タントラ・アートに接近したりするコース」⁴²を辿った写真家である⁴³。本誌掲載の「体制裏の芸術家」は、羽永が被写体としてきたアングラ芸術を、自身が撮影した写真を添えて

縦横無尽に語る貴重なエッセイである。

本号に詩作品が掲載されている詩人とその評者は四組。安水稔和の作品を福井久子が評している。神戸大学文学部の同窓である神戸の詩人安水と福井は、『くろおべす』（1953・7～61・10）、『たうろす』（1963・1～98・4）といった同人誌で活動を共にしていた。

田村隆一の連続対談第三回のゲストは演出家の村井志摩子。西尾実の講義に演劇への関心を触発された学生時代から、舞台芸術学院で土方与志の薫陶を受けた二十代、チェコでの留学体験を語る。

■5号（1970年5月、副題「詩と芸術の総合誌」）

巻頭には「鏡の詩」と題し、万博を目前に三六歳で病死した石原和夫の作品とその紹介文を配する。特集は「シュールレアリスム」。近い時期には、『パイディア』6号（竹内書店、1969・8）や『思潮』1・2号（思潮社、1970・6、9）がシュールレアリスムを特集しているが、本誌はとくに日本的「シュール」に照準したところに特徴をもつ。

鶴岡善久「不眠の夢—あるいは日本のシュールレアリスム」（→『シュールレアリスムの発見』湯川書房、1979・3）は、詩人富士原清一の出現を日本におけるシュールレアリスムの開花と捉え、この詩人のファシズムの時代における「夜」へ

⁴² ヨシダ・ヨシエ『解体劇の幕降りて—60年代前衛美術史』前掲、127頁。

⁴³ それらの作品のうち千点は、『羽永光利一〇〇〇／紙本文庫版』（一〇〇〇BUNKO、2017・4、解説＝黒グライ児）で見ることが出来る。

の下降に「シュルレアリスムの栄光と悲惨」を見出す。さらに『瀧口修造の詩的実験 1927～1937』（思潮社、1967・12）によってはじめて全貌を現した瀧口修造のこの時代の活動に注目し、三〇年代から戦後の飯島耕一、大岡信へと至るシュルレアリスムの展開を素描している。

特集後半は「ピエロタ会見記—瀧口修造の眼は何を見たか」。当初、企画者のヨシダは、瀧口本人を囲み、土方巽、唐十郎らを招いて座談会を催そうとしていたが、実現を見なかった。編集部による概説に続き、瀧口修造の詩の抄録、土方巽の写真（中谷忠雄撮影）、状況劇場の写真（羽永光利撮影）、唐十郎の小文「誰が為の化粧ぞ」、「京都芸大N」という署名を付した小文「瀧口修造を超えて」が配されている。さらに、ヨシダ・ヨシエが総括として「超現実的蛇足の弁」（→『瀧口修造コレクション』別巻、前掲）を著し、同時代のアンダーグラウンド文化に瀧口が有する人脈について語る。「編集後記」によれば、当初この企画には針生一郎の寄稿も予定されていたらしい。

今号より本郷隆の評論「春日偶感」の連載が開始されている（3回、8号まで）。『歷程』出身の本郷は、かねてから会田綱雄の作品を好み、「非現実的世界の完結性・実体性獲得の衝動」と結び合った「個人的な眼の禁止」を貫徹する「伝説」の会田の詩法に、詩の領域の新たな拡張

の可能性を見出していた⁴⁴。本郷はこの連載では、随筆的な構えのもと、伊東静雄、金子光晴、中原中也、宮沢賢治ら近代詩人から芭蕉、万葉歌人までを語る。

本号に詩作品が掲載されている詩人とその評者は七組。猿田長春作品について渡辺みえこが語っているが、両者はいずれも詩誌『にゆくす』の同人である⁴⁵。知念栄喜が本誌に掲載した作品「みやらび抄」は、H氏賞受賞作『みやらび』（仮面社、1970・4）を抄録したものである。内村剛介による「現代ソビエト詩選」の2回目は、アレクサンドル・ヤーシンとノヴェラ・マトヴェワの作品を訳出、紹介する。「私の町」シリーズには、新潮文庫の大江健三郎『死者の奢り・飼育』等の表紙で知られる山下菊二が登場している。

44 本郷隆「個人的な眼の否定—或る系譜についてのノート」（『三田文学』1955・5→『本郷隆・詩の世界』草野心平・岡本喬編、湯川書房、1980・5）。本郷は「人間への興味—「伝説」「楡山節考」をめぐる」（『歷程』1957・3）では、会田の「伝説」を深沢七郎の「楡山節考」（『中央公論』1956・11）と並べて考察している。本郷に関するモノグラフィとして、斎藤勇一『本郷隆—ある詩人の精神の軌跡』（無明社出版、1992・4）を参照。同書によれば、本郷は中央公論社校閲部の社員であり、深沢から「風流夢譚」（『中央公論』1960・12）の原稿を受け取ったのも、本郷だった。

45 渡辺は、三島由紀夫に関するクイア・リーディングの先駆とも言える評論『女のいない死の楽園 供儀の身体・三島由紀夫』（パンドラ、1997・10）の著者として知られる。

■6号（1970年6月、副題「詩と芸術の総合誌」）

第一特集「構造主義—その思想と方法」は二篇の論文からなる。すでに『バイディア』（1号、1968・4）でも構造主義が特集されており、本誌がそうした動向を追っていたことを窺わせる。

巻頭論文は多田智満子「ヴェラスケスの鏡—ミシェル・フーコーの《ことばともの》」（→『多田智満子詩集』思潮社、1972・11）である。同年代の矢川澄子らが1954年に始めた同人誌『未定』に加わり、澁澤龍彦や生田耕作と旧知の間柄だった多田は⁴⁶、1956年刊行の詩集『花火』（書肆ユリイカ）で詩壇デビュー、神戸六甲に暮し、60年代には安水稔和らの神戸の同人誌『くろおべす』、『たうろす』にも参加した詩人である。1970年にジョルジュ・シャルボニエ『レヴィ=ストロースとの対話』の翻訳（みすず書房）を刊行、構造主義にも通暁していた。本号掲載の評論は、ヴェラスケス「ラス・メニナス」を論じたフーコー『言葉と物』の序章を考察対象とし、「全てが関数であり、あらゆる単語が前後のシンタクスによってその数値を変化させられる」ような「詩」の言葉と、「ラス・メニナス」に描かれた「鏡の中の王様」との構造的

46 同人誌『未定』の動向、および澁澤と多田の関係については、磯崎純一『龍彦親王航海記—澁澤龍彦伝』（白水社、2019・11）第3章を参照。

類比性を論ずる。高内杜介の論文「構造主義と変換の美学」は、群論を中心とした数学的知見から構造主義にアプローチし、シンタクスの同型変換に着目する構造主義に、「自我の自由による抽象的な構成の美学ではなく、自我の抑制による同定的な変換の美学」を見出している。

第二特集「近代芸術への造反」も同じく二篇の論文からなる。市川雅「自由な精神を吐く」は、70年3月にみずからが舞踊批評家として企画・制作した「エクスパンディド・アート・フェスティバル」について報告した一文。この芸術祭に参加したダンサーには、邦千谷や石井満隆らがあり、飯村隆彦もスタッフとして参加している。ヨシダ・ヨシエ「闇・恐怖・怨恨〈肉体の奥地〉」は、新宿アート・シアターで催された唐十郎の「愛のリサイタル」を取り上げ、そこに登場した土方巽の肉体を、「東京の焦土」の記憶と重ねつつ語る。

嶋岡晨、本郷隆の連載のほかにも、単発の評論として花田英三「『荒地』の詩人たち—鮎川信夫を中心に」が掲載されている。花田は、『荒地』派の詩人たちが「死の影にロマンティックに酔っていた」と批判、鮎川が評論「戦争責任論の去就」（『現代批評』1959・4、6）にいたってようやく戦争体験を「加害者」の視点から捉えることの必要性を自覚したと指摘し、ここに鮎川の現実認識の深まりを見出す。な

お、花田は会田に深く傾倒した詩人であり、「ピエロタからの手紙 会田綱雄追悼」を含む詩集は『ピエロタへの手紙』（矢立出版、1994・4）と題されている。

匿名記事「今日の視点」は、郵便物を使ったいわゆるメール・ハプニングの試みを、松沢宥、赤瀬川原平、根岸和弘、坪内直紀の実践に即して紹介する。また、本号の「新人詩」には守靖男・川上二郎・北條裕子が選出され、財部鳥子と江森国友が対談の形で選評を行なっている。

■7号（1970年7月、副題「詩と芸術」）

本号は緊急特集「表現の自主規制」として、「現代美術野外フェスティバル」で生じた表現の自由をめぐる事件を検証している。1970年4月1日より横浜市青葉区の児童厚生施設「こどもの国」で開催され、作家の自主企画による自由な表現を謳ったこの野外芸術祭では、開催まもなくヴェトナム戦争下のソンミ村虐殺事件をシルクスクリーンで印刷した川村直子の作品が撤去されるなど、実行委員会や会場職員、スポンサーだった東急電鉄社員によって、少なくとも十八点の作品が破壊撤去されるという事態が生じた。加治屋健司が言うように、「作家の表現の自由を大きく侵害した展覧会として歴史に名を残す」⁴⁷芸術祭であり、混

乱の内に5月末に閉会した。

閉会后、ヨシダ・ヨシエは「告発はすべての内側にも」（『美術手帖』70・6）でこの展覧会を取り上げ、権力がみずから手を下したのでなく、作家である実行委みずからが作品の撤去に手を貸したことを、異例の事件として問題視する。表現の自由の権力による規制という問題は、ヨシダがもっとも敏感に反応する批評上の課題であった。

同じ頃、実行委員会の編集協力によるこの展覧会の記録として、『70150 + a・現代美術野外フェスティバル』（ブロンズ社、70・6）が刊行されており、出展作家の一覧、展覧会の主だった記録はここで確認できる。本号の緊急特集は、これに対抗する狙いもあったと見られる。実行委員のひとりであった青山光佑は、実行委員会が連名で表した「統一見解と姿勢」に賛同しないことを表明した上で⁴⁸、本誌の特集に執筆者として加わった。ヨシダによる問題提起「はじめに」（→『流氓の解放区』現代創美社、1977・7）に続き、破壊撤去作品のリストを付し、三度にわたって開催されたシンポジウム、二度の抗議集会の様子が記録されている。

島アートプロジェクト2009「吉宝丸」
広島アートプロジェクト、2010・8

⁴⁸ 実行委員会が発表した「統一見解と姿勢」は、『70150 + a・現代美術野外フェスティバル』（前掲）の巻末に掲出されている。

⁴⁷ 加治屋健司「日本のアートプロジェクト その歴史と近年の展開」（『広

■ 8号（1970年8月、副題「詩と芸術」）

特集は「地獄の季節」。塚本邦雄と宗左近の論文が掲載された。塚本が同時代のアングラ文化のなかでひとときわ存在感を放った歌人であることは論を俟たない。「昇地獄篇—王朝美学に関する一考察」（→『序破急』筑摩書房、1971・11）は良経と定家を論じ、新古今集における「地獄」あるいは「幻視者の全的な夢」、恋の歌につきまとう「寂寥と虚無感」を語る。宗左近は、『歷程』『同時代』を介して本誌常連の詩人たちとつながる詩人にして美術批評家だが、「死と生の幻視芸術」（→『恍惚の王国』朝日出版社、1973・11）は、北斎作といわれる「性器のデッサン」を取り上げ、《地獄絵》を「幻視をひきぬいた《死と生の芸術》」と見る。

本号より嶋岡晨の新連載「実験・発見・冒険」が始まっている（5回、12号まで）。のちの『詩とエロスの冒険』（社会思想社、71・10）のエスキースとなったと見られる、覚書風の評論エッセイである⁴⁹。安宅夏夫の詩「私は世界を尻の穴から見る」（『ラマ・タブタブ』長帽子の

会、1969・7）から説き起こし、ダダイズムやシュルレアリスムに遡りつつ近現代詩史における「エロス」の展開をたどる。

読み切りの評論は三編。飯村隆彦「詩と映画と」は、高橋新吉や萩原恭次郎らのダダイズム詩を愛読した高校時代から、アクション・ペインティングに傾倒した大学時代、その後の実験映画の試みについて回想する。ヨシダ・ヨシエが「VAN映画科学研究所」に参加して以来、前衛映画のパイオニアである飯村をよく知っていたことはすでに見た。

江口幹「性にアナキーであること—ダニエル・ゲランの思想を中心に」は、『現代のアナキズム』（三一新書）をはじめとする著作を翻訳していた江口が、ゲランを通して「現代におけるエロティシズムによる抵抗」とりわけ「同性愛の擁護」を説く。江口は在野の仏文学者にしてアナキストとして知られ⁵⁰、のちに小田実らの『人間として』（筑摩書房、1970・3～72・12）にも参加している。

遠丸立「風の詩人の出発—吉本隆明「日時計篇」をめぐって」（→『増補吉本隆明論』思潮社、1972・7）は、昭和二四年から二六年にかけての吉本隆明の動向を追跡し、「日時計篇」の詩作品に「にんげん」一般と「わたし」との対立抗争

49 この時期の嶋岡は、『新しい詩への道』（社会思想社、現代教養文庫、1970・10）を上梓するなど、多作を極める。本書のあとがきには、「今日の新しい詩的状況に関しては、詩誌「ピエロタ」連載中のわたしのエッセイを、ぜひ一読してください」との記述が読まれる（199頁）。この連載「実験・発見・冒険」を指しているよう。

50 江口自身の回想録として、『自由を生きる—ある家出少年の歩み』（筑摩書房、1980・1）がある。

を見出す。かつて加賀乙彦、白川正芳らの同人誌『犀』（1964・11～67・7）に加わっていた遠丸は、すでに『吉本隆明論』（仮面社、1969・1）を上梓していた批評家である。本誌が吉本隆明の思想にクローズアップするのはこの論文からであり、このあたりから次第に吉本周辺の批評家が本誌の性格を「思想誌」へと転換させてゆくことになる。

本号に詩作品が掲載されている詩人とその評者は三組。このうち、花井純一郎と安宅夏夫は『長帽子』を介して繋がる。佐々木幹郎は『長帽子』にも参加していたが、藤井貞和とは『白鯨』を介して繋がっていた。訳詩はセオドー・レトキの二作品（石田安弘訳）。同時期には、『都市』3号（1970・7）でも石田の訳によってレトキ作品が紹介されている。

■9号（1970年9月、副題「詩と芸術」）

特集は「悲惨の栄光のシュルレアリスト 富士原清一詩集」。すでに触れたように、鶴岡善久を中心として『富士原清一詩集 魔法書或は我が祖先の宇宙学』が母岩社より刊行されたことを受けた企画である。1927年に北園克衛と日本初のシュルレアリスム専門誌『薔薇・魔術・学説』を、翌年に詩誌『衣裳の太陽』を創刊した富士原は、この頃から瀧口修造を知り、30年には瀧口の主唱を受けて詩誌『シュルレアリスム・アンテルナ

ショナル』を創刊した。こうして瀧口との交友が続くなかで、大阪市役所、第一書房、太平洋協会に勤務する傍ら翻訳や詩作に携わった富士原は、1944年に戦死した。歿年三六⁵¹。『ピエロタ』は5号とあわせて、詩人富士原清一を歿後はじめて本格的に紹介した雑誌となった。

巻頭に配されたのは、瀧口修造のエッセイ「富士原清一に—地上のきみの守護天使より」である。富士原との青春時代の記憶を回想する一文は、瀧口にしては珍しく情動的な調子を帯びる。母岩社版『富士原清一詩集』の序文として転載されている。

鶴岡善久「いま開いた鏡の底の一富士原清一試論」（『→シュルレアリスムの発見』前掲）は、古本屋で買った『詩と詩論』（1930・3）に「魔法書或は我が祖先の宇宙学」をはじめて見出したときの記憶から説き起こし、モダニズムの影響下で「現実をきわめて稀薄なものに転じようとする無意識裡の意図」を備えた初期詩篇から、「時代への危機意識」をたたえた後期作品までの展開を、「水」「太陽」「鏡」「稲妻」といったテーマを辿りつつ追跡する。本格的な富士原論の嚆矢

51 富士原の経歴は、京谷裕彰が作成した「富士原清一年譜」（京谷裕彰編『薔薇色のアパリシオン 富士原清一詩文集成』共和国、2019・9）に詳しい。なお本書には、瀧口の「富士原清一に—地上のきみの守護天使より」が再録されている。

と言えよう。瀧口と鶴岡のエッセイの間には、「富士原清一遺稿集（1927～1934）」として、この詩人の作品が掲載されている。また、特集の最後には作品発表誌一覧とおぼえがきが付されている。

読み切りの評論「死の詩人・原民喜—三六五階段を踏む「死」の内景」は、『歴史』の詩人にして原民喜と交友のあった長光太による原民喜論⁵²。また、本号に詩作品を掲載した詩人のうち、梅田智江は金子光晴率いる『あいなめ』の同人である。

■ 10号（1970年11月、副題「詩と芸術」）

羽永光利が撮影した「唐十郎主宰状況劇場の舞台稽古」の写真に続き、「反近代の構造」と題する特集が組まれている。論文は三編。舞踊評論家・市川雅「反近代—前近代—超近代—近代的思考の内実を探ろう」は、磯田光一が情動的ナショナリズムへの回帰を結論することを「短絡」として批判、「国家という近代的理念の無媒介的な受容が逆に情動的なものを刺激し発情させた」という認識を立て、「反近代論」は「近代的思考の

内実をさぐることによって有効に果たされる」と述べる。その試みの実践として「役者の肉体のイメージから劇的展開を決してゆく」唐十郎や鈴木忠志が、「歌舞伎の前近代的な特徴を止揚」することに注目を促している。

花井純一郎「巫女の世界—反近代の言語をさぐる覚えがき」は、秋元松代の近刊『かさぶた式部考・常陸坊海尊』（河出書房新社、1969・11）を論じた評論。広末保「遊行的なるもの」（『文学』1965・2、3→『悪場所の発想—伝承の創造的回復』三省堂、1970・6）を批判的に吟味しつつ柳田国男や堀一郎を参照し、「式部考」に「巫女的なもの」を見出す。なお、『長帽子』に加わり、母岩社刊行の詩歌集『祝祭空間』を持つ花井の本名は桜井好朗、日本中世文化を研究したアカデミシャンである。

福地康之「反世界の情熱—塔晶夫頌」は、『虚無への供物』（講談社、1964・2）をはじめとする『中井英夫作品集』（三一書房、1969・10）所収作品を論じた評論。『虚無への供物』を、従来の「純文学」が忌避する「人間の内部にある本質的な罪と悪の問題」に触れた作品として定位する。福地は、六〇年安保を野口武彦率いる全自連の一員として通過し、この体験を批評の核心に据えた、いわゆる「安中派」世代の批評家である。批評集に『最後の難破船—《安保体験》の思想的基軸』

52 長光太と原民喜との交友については、梯久美子『原民喜 愛と死と孤独の肖像』（岩波書店、2018・7）を参照。戦後、広島にいた原に上京を勧めたのが、長であったという（同書、198-9頁）。両者の関係、および原が長に宛てた手紙（北海道道立文学館所蔵）については、「原民喜研究のいま」（『北海道新聞』2016・8・12、15）が詳しく報じている。

（深夜叢書社、1968・9、装丁は中村宏）がある。このころより本誌には、深夜叢書社およびその社主・齋藤慎爾周辺の批評家たちが名を連ねるようになってゆく。

本号掲載の読み切りの論文は、高内壮介「面の思想或いは恐怖について—岡崎清一郎における認識と知恵」。同郷の詩人岡崎との交友関係はカッコに括られ、岡崎の詩における時間の否定と存在への恐愕とが作品に即してフォーマリスティックに論じられる。

詩作品が掲載されている詩人とその評者の七組である。三井葉子とその評者倉橋健一はいずれも小野十三郎に親炙した詩人だが⁵³、この当時、両者は『緑の狼』という雑誌でともに活動していたという。石原吉郎が評した小柳玲子は、石原の主宰する『ロシナンテ』に加わっていた。吉澤脩と福多久は金井直が主宰する『花・現代詩』のメンバー、宮岡頌子は金石稔が主宰する『騷騷』のメンバーであり、山田賢二とその評者山田達雄は同じく中日詩人会に所属していた。野海青児が評を寄せた詩人の安宅啓子は安宅夏夫の妻である。

53 倉橋は佐々木幹郎・藤井貞和らとともに雑誌『犯罪』（構造社）の編集を手がけていた。構造社より、『青素』から分岐して創刊された雑誌である。この後、倉橋・佐々木・藤井の三者は、詩誌『白鯨』（1972・11～75・11）を創刊した。倉橋健一『詩が円熟するとき—詩的60年代環流』（思潮社、2010・9）を参照。

本号では、第8回「新人詩」の入選者として北條裕子と稲垣とし子の作品、佳作としてその他五名の作品が掲載され、江森国友が選評を記す。匿名書評「おもしろい本」では飯村隆彦『芸術と非芸術の間』（三一書房）が取り上げられている。

■ 11号（1971年4月、副題「詩と芸術」）

第一特集「黒いユーモア」は、伊東守男の編集による『ブラック・ユーモア選集』（早川書店、全6巻）の刊行に合わせた企画である。安宅夏夫「現代詩におけるブラックユーモア—吉岡実・会田綱雄の作品などについて」は、伊東の編集企画を「一九七〇年を象徴する一つの文学的事件」と呼びつつ、作品にブラックユーモアが認められる詩人として、会田・吉岡の作品を考察する。上記企画の編者である伊東守男による「アンチヒューマンイズムの黒化—ブラック・ユーモア随筆」は、アルトーやバタイユに言及し、「人間侮蔑、アンチ・ユマニスティックな対存在態度の自己表出」としてブラックユーモアを論ずる。

第二特集「惰眠の空に拡がる焼身の炎」は、富岡高校の二年生で1969年末に焼身自殺した矢島雅彦の遺稿集「若さをみんなで」を抄録、同校教諭による追悼文と、群馬の詩人・斎藤朋雄による事件の顛末の報告を掲載する。読み切りの評論は、鍵屋幸信「ウィリアムズ35の断章」。

すでに『ウィリアムズ詩集』（思潮社、1968・3）を刊行していた鍵谷が、アフォリズム形式でウィリアムズの教養形成、歴史への興味、芸術観を語っている。

本号では、詩は二つのブロックに分けて掲載された。「作品Ⅰ」として巻頭に掲げられているのは、草野心平、西脇順三郎、村野四郎という三大家の作品。「作品Ⅱ」には、星野徹（中崎一夫）、空田瑛二（黒田三郎）、黒部節子（中野嘉一）、横川礼子、福多久（花井純一郎、カッコ内は評者）らの詩と評が掲載されている。このうち、星野と黒部は、会田千衣子らとともに『灣』の同人であった。星野は英詩研究者としても知られるが、ここで彼を評した中崎もまた、英詩を研究するアカデミシャン（本名は田村英之助）であった。空田は詩誌『解纜』（1970・6～?）、横川は『あいなめ』の同人である。「新人詩」に掲載されたのは、西野勉と美栄関の作品である（選評は財部鳥子）。「私の町」シリーズには、画家であり陶磁器のデザイナーである中武久が登場する。

本号より、「読書案内」と題して書評が拡充されている。山中散生は母岩社版『富士原清一詩集』を評する。山中は富士原とは旧知の仲であるが⁵⁴、この書評

では、富士原の詩をモダニズムの影響下にあった時期、ブルトン理論を究明すべく自動記述法を試みた時期、エリュアールの精神と方法への共感を示し、新しい美の基準を追求した時期の三期に区分して捉える。なお、山中は近い時期にブルトンを中心とした『黒いユーモア選集』（国文社）の編集を手がけていた。伊東守男による『ブラック・ユーモア選集』は、国文社のこのアンソロジーに倣ったものと見られる。

■12号（1971年9月、副題なし）

本号より季刊誌に移行し、これまで副題に載っていた「詩と芸術」という看板が下されている。巻頭に配された評論は、渡辺広士「ロートレアモン〈文学のギプス〉破壊を目指す明晰な意識」である。渡辺はこの当時、森川達也、松原新一らとともに『審美』（審美社、1965・12～73・11）を拠点に批評活動を展開していた仏文学者である。

特集は、歿後六〇年を記念した「石川啄木の詩と思想」。対談が二編、評論が九編と、従来の特集に比べて大きく増量され、特集のみで83頁に及ぶ。第一の対談は、秋山清と伊藤信吉の「啄木文学の軌跡を探る」。伊藤は「センチメンタリズムは詩的なものたり得ない、という簡単な考えかた」を批判し、秋山は、『呼子と口笛』をいちやく社会主義的な立

54 黒沢義輝「山中散生年譜」（黒沢義輝編『山中散生書誌年譜』（丹精社、2005・10）を参照。

場から評価したのが荒畑寒村であったことに注目、両者は啄木におけるナショナルリズムあるいは民族主義の再検討を以後の課題として設定した。

第二の対談は、詩誌『騷騷』で協働していた金石稔と熊倉正雄の「巨人願望への栄光と悲惨」。熊倉は啄木の歌の「砂」にむしろ「巨人願望」を感じると切り出すが、金石は啄木は「つまらない」といい、その理由を「自分の書いたものにつき動かされていく感じ」が欠けているところに見出す。

精神科医の福島章による「知性・退行・創造—啄木の精神病理」（→『正気と狂気の間—作家のパトグラフィ』至文堂、1972）は、啄木の作歌を一種の「退行」と捉え、それによって「一般の民衆の心情の」に達しえたと論ずる。歌人の佐佐木幸綱による「啄木短歌の方法試論」は、啄木が個人的な体験の痕跡を作品の表面から消去したのに対して、近代以後の短歌史の展開はむしろそれを強調することで個性個別性を獲得しようとしたという見通しを示す。また、しまね・きよし「自我への凝結と状況への飛翔—思想家としての石川啄木」は、丸山静、小田切秀雄、小田実の啄木評を参照しつつ、状況それ自体を思想形成の材料とした「思想家」として啄木を評価する。しまねは『思想の科学』出身の評論家である。ヴァラー・マルコワ「わが石川啄木」と草鹿

外吉「啄木とロシア文学」は、それぞれロシアでの啄木受容、啄木とロシア文学との関係を論ずる。

詩人による論考は二編。及川均「「はてしなき議論の後」について」は、啄木の日記を踏まえつつ、「はてしなき議論の後」が『呼子と口笛』へと書き換えられていった過程を追跡する、一種の生成研究である。城侑「啄木の`眼、が現代に教えるもの」は、啄木を萩原朔太郎の用語の類似性を指摘し、「期待」あるいは「可能性への芽生え」を啄木の歌の特質として別括する。末尾に藤岡武雄「啄木研究の総括と展望」と岩城之徳作成の「石川啄木年譜」「啄木・参考文献」、関係図書の紹介を付す。同時代における啄木研究の状況を伝える資料である。

本号に作品が掲載された詩人は、阿久根靖夫を含む四名。詩人による作品評は誌面から消えた。江森国友の選による「新人詩」は五編掲載。他方、「詩書紹介」として、江森国友（芝山幹郎）、金子光晴（ワシオ・トシヒコ）、新谷行（知念栄喜）、佃学（清水哲男、カッコ内は評者）の新刊が取り上げられている。清水哲男による佃学評（→『唄が火につつまれる』思潮社、1977・4）は、両者の京都大学時代からの繋がりを語るエッセイである。

美術関係の記事も減少し、今号では赤塚行雄「美術への招待」のみとなっている。ここで赤塚は、赤瀬川原平・野中ユ

りらによる画集『絵次元』の展示（銀座画廊春秋、71年3月開催）と、中西夏之が『海』（中央公論社）の表紙に提供した作品を検討している。

■ 13号（1971年12月、副題なし）

特集は「吉本隆明の文学と思想の論理」。前号の予告では、執筆予定者として松田政男と津村喬の名が挙がっていたが、掲載には至らなかった。巻頭対談は粟津則雄と白川正芳による「固有時の詩人—吉本隆明の詩的世界を照射する」。白川はかつて『犀』同人だった批評家。白川が高橋和巳の死とそれについての吉本の発言を話題にするところからはじまり、粟津は「他者」を描きえなかった高橋と「他者」が見えている吉本の差異、吉本の思想の「性急さ」を指摘する。

菅孝行「吉本隆明 覚書—共同性の原基形態をめぐる」は、国家や家に「幻想の共同性」を見る思想を破れるか否かという問題を、吉本思想から引き受けるべき課題として設定する。岡庭昇「《掟》と《追放》—吉本隆明の《共同体》・序説」（→『幻想の国家とことば』筑摩書房、1972・10）は、吉本の出発点に共同体世界へと身を委ねたいという欲求とそれへの反撥を見出し、疎外しあう个体自我と共同体とを新たな《共同体》へと揚棄することの可能性を問う。なお当時の文芸批評シーンの第一線に立っていた

岡庭は、かつては『三田詩人』（第2期）で会田千衣子、吉増剛造、安宅夏夫らと活動をともしていた詩人であった。

河野信子「『共同幻想論』の世界」（→『日本思想家文庫1・吉本隆明論』母岩社、1973・3）は、『共同幻想論』を女性の存在論として読み換える点で、上野千鶴子「対幻想論」（『思想の科学』1982・1）に先駆する。なお河野は、谷川雁らが1958年に立ち上げた「サークル村」に加わり、森崎和江を中心に創刊された『無名通信』に初期から参加、当時はその主宰を務めていた⁵⁵。斎藤慎爾らの編集による評論集『闇を打つ鋏—日本のナショナリティ序説』（深夜叢書社、1970・7、装丁は赤瀬川源平）を刊行し、これに前後して『現代の眼』や『思想の科学』にも執筆の場を持った、「自立派」に数えてよい女性批評家である。

詩人による吉本論は三編。小川和佑「吉本隆明の抒情的原質—立原道造の詩との和音を探る」（→「吉本隆明論—その抒情的原質」、『詩神の魅惑』第三文明

55 初期『無名通信』の刊行の経緯と動向については、森崎和江「『無名通信』が問うたもの（1）（2）」（『福岡県女性史・女性学ノート』福岡県女性史・女性学研究協議会、1994・12、1996・3）を参照。水溜真由美『「サークル村」と森崎和江』（ナカニシヤ出版、2013・4）第3部第2章にも、河野と森崎を中心とした、『無名通信』についての記述がある。

社、1972・10）は、吉本の初期詩篇における立原のソネットの影響を論証し、詩人吉本を芥川龍之介・堀辰雄・立原道造の系譜に定位することを提言する。花井純一郎「巨匠か水仙か—吉本隆明の表現論をよぎる断片的考察」は、表出論の展開を辿りつつ石原吉郎の「沈黙と失語」を想起し、吉本が表現論の領域へ「決定的次元」としての「沈黙」を収めとったことに注目を促す。

高内壮介「思想の汗—「詩と科学と問題」と吉本思想の創出過程」（→『暴力のロゴス—科学のディアログ』母岩社、1973・7）は、吉本のエッセイ「詩と科学の問題」を踏まえつつ、若き吉本が遠山啓から「論理の単一性の崩壊という事実」を受け取ったと推定し、その後の吉本の「自立論」が「自己表出というもっとも常識的な逆説の秘儀を全く含まない自我主義」に陥ったと批判した。

神学者の延原時行による「「関係の絶対性」とは何か？—『マチウ書試論』からの出発」は、田川建三による吉本批判を参照しつつ、「マチウ書試論」がイエスの生と深く共鳴する点において、「マルコ書」に通ずることを指摘する。特集の末尾には、1971年までの吉本の年譜が付されている。

本号掲載の詩は、芝山幹郎と佃学とによる二篇。「読書案内」とでは橋本真里が金石稔の新刊を評している。郷原宏ら

の『長帽子』から出発した橋本は、斎藤慎爾が編集を手がけた評論集『黄昏の系譜』（深夜叢書社、1972・3）および詩集『幽明婚』（同、1973・12）を持つほか、河野信子との共著として『母の思想』（太平出版社、1974）を刊行した批評家である。今号は、橋本真里と河野信子という、吉本思想の影響が色濃い二人の女性批評家を繋ぐ契機となったとも考えられよう。

■ 14号（1972年3月、副題なし）

特集は「北一輝の革命思想と浪漫的軌跡」。北一輝は、すでに六〇年代には『北一輝著作集』（全3巻、みすず書房、1959・3～72・4）の刊行を機に脚光を浴び、村上一郎、三島由紀夫、竹内好、橋川文三らが注目する存在となっていた。研究に大きな展開をもたらしたのは、初期論文の発見を機に北の特集を組んだ1970年8月号『現代の眼』であり、その中心を担ったのが、松本健一であった。

今号の巻頭を飾るのは、松本の評論「北一輝の浪漫性—恋愛と革命について」（→『北一輝論』現代評論社、1972・3）である。北の詩人的性格と恋愛哲学を評伝と絡めて語り、三島が自己の浪漫を天皇という原存在に託したのに対し、北における浪漫の世界の主宰者はあくまでも唯一者と自負する北自身であった、と松本は論ずる。

松浦玲「明治大帝ノ革命」と北一輝の革命」は、『国家改造案原理大綱』と

『日本改造法案大綱』において中国革命との連携の問題が放棄されてしまったことを北の失敗として評価しつつ、北が日本のみの革命プランを構築するなかで「天皇」が入り込んできたことを跡付ける。長谷川義記「東洋的共和政と北一輝の愛国的土着思想」は、西洋的認識に拠ることなく国家と社会の論理を組み立てた点に、北の国体論の可能性の中心を求める。なお長谷川は、すでに著書『北一輝』（紀伊国屋新書、1969・9）を上梓していた北一輝研究者である。秋山清「北一輝を考える」は、「日本改造法案大綱」を読んだ際の体験を振り返りつつ、社会主義を日本の特殊性において捉え直し、具体的現実的な革命案を樹立したところに北の存在意義を見出している。

今回の特集の対談は二編。内村剛介・桶谷秀昭「日本近代の虚妄性—北一輝の近代への叛逆とその思想の内質」は、現実から被るべき屈折を欠いた北のステイックな思考のあり方、ニヒリズムへの傾斜、『明星』派から受けた影響について考察を加える。「浪漫的革命家・北一輝—天皇絶対制下の革命思想とその原核」は、松本健一と判沢弘との対談。判沢は『土着の思想』（紀伊国屋新書、1967・10）を著書にもつ政治思想史家である。末尾には松本が作成した北一輝の年譜が付される。

今号から二編の連載が開始された。松

本健一「非在のユートピア—孤島」（2回、15号まで→『革命的ロマン主義の位相』伝統と現代社、1973・7）は、柳田國男、折口信夫から三島由紀夫、島尾敏雄、高橋和巳ら、さまざまな近代日本の文学者のテキストを渉猟しつつ、日本人における「魂のふるさととしての島の意味」を検証する。のちの『孤島コンミュニオン論』（現代評論社、1972・11）のエスキースである。

これまで本誌に評論を掲載してきた高内壯介は、評論「科学と人間とのドラマ」（6回、19号まで→『暴力のロゴス—科学のディアログ』前掲）の連載を始めた。独学で数学と物理学の研究に傾注した異能の詩論家である。『同時代』の同人でもあり、六〇年代前半から湯川秀樹の物理学やブルバキ派の群論を論じる論文を発表していた。高内はこの連載では、ニュートン力学から現代物理学への展開を辿りながら、科学と「詩」との接点を探る。

■ 15号（1972年6月、副題「文学と思想」）

本号より『ピエロタ』は「文学と思想」という副題を戴き、思想史として旗幟をより鮮明にした。特集は「北村透谷の文学と思想の挫折」である。同時代には、いわゆる自立派の批評家たちを中心として、透谷ブームとも呼ぶべき現象が醸されていた。後記「編集室の窓」で緑川登が記すところによれば、当初は村上一郎と平

岡敏夫の対談が企画されていたが、村上の体調不良により実現しなかったという。

巻頭論文は北川透「〈他界〉とその根—北村透谷についての」（→『北村透谷試論Ⅱ内部生命の砦』冬樹社、1976・9）。この論文では保田與重郎の透谷論「他界の観念」を参照しつつ透谷の「他界に対する観念」を論じ、『蓬萊曲』における「他界」の創出の過程から「詩が死を引き受け組み伏せることで詩となってゆく、詩の自由の本質」を別括する。桶谷秀昭「北村透谷論—情況の奈落」は、山路愛山と北村透谷のいわゆる人生相渉論争を再検討し、透谷における「革命の根源的な情念」と、それに結ばれた「文体の屈折したトーン」を掴み損ねた従来の透谷論を批判する。なお、ここに名を連ねた北川と桶谷は、吉本隆明や村上一郎と並んで自立派を代表する批評家であり、当時の透谷ブームの立役者であった。ただし桶谷論文は、すでに既刊『近代の奈落』（国文社、1968・4）からの転載である。本誌がすでにムック化していることを示しているよう。

澤村光博「北村透谷—そのキリスト教の変質」は、自由民権運動への参加、結婚、キリスト教への入信、自殺という透谷の動向を辿りつつ、とくに「内部生命論」を中心に論じ、透谷のキリスト教を審美的な理想を含む「生命の自由」という理念の問題として考察する。杉本春生「〈^{アニムス}俠と〈^{アニマ}純潔〉に敗れる透谷—虚構としての

^{ネーチュア}〈自然〉の意識」（→『廃墟と結晶』サンリオ出版、1974・8）は、「八犬伝」の伏姫を論じた透谷の「処女の純潔を論ず」に、因果の理法をこえた人間の純潔という内面的理想の吐露を読み、透谷の「虚構としての自然観」に戦後文学における「内的自然」の起源を見出す。平岡敏夫「透谷の恋愛と文学—`Jungfräulichkeit、=`Chastity。」（→『明治文学史の周辺』有精堂、1976・11）は森鷗外・石橋忍月による「舞姫」論争を参照しつつ「処女の純潔を論ず」を論じ、単純な近代主義とは異質な「ありうべき日本の近代」への希求をここに読む。平岡は当時すでに『北村透谷研究』（有精堂出版、1967・6）を刊行していた、透谷研究の第一人者である。

掲載された詩作品は二編。本誌の前半期を支えた詩人・財部鳥子が本誌に寄稿したのは、今号が最後となった。「読書案内」は四編。松本健一『北一輝論』は、本誌前号で対談相手となった判沢弘が評する。また、北條裕子詩集『形象』の評者は澤村光博。この詩集は会田綱雄による跋を付して母岩社より刊行された。北條は、本誌「新人詩」選出者としては最も有力の詩人であると言えよう。

■ 16号（1972年10月、副題「文学と思想」）

特集は「柳田国男の民俗思想とその位相」。巻頭には、橋川文三「北一輝と柳田国男」が配される。明治末期の閉鎖

状況を超える原理を提出した思想家として、北と柳田を再評価する論文である。この論文は、田中美知太郎編『思想の歴史12 二十世紀アジアの展開』（平凡社、1966・3）所収分からの転載だが、後藤総一郎が書き下ろしの解説「思想史における柳田国男への視角」（→『柳田国男論序説』伝統と現代社、1972・12）を付す。橋川を師とする後藤は、六〇年代前半には『思想の科学』の主要執筆者の一人となり、七〇年前後からは『現代の眼』や『流動』といった左翼総会屋雑誌に頻繁に評論を著していた。

後藤は本号では、上記解説の他に、評論「柳田学と転向」（→『柳田国男論序説』前掲）を著している。後藤はここで、六〇年安保の挫折体験のちに柳田に関心を寄せていった過程を振り返りつつ、昭和転向期における転向者なかならず新人会のメンバーが柳田学へなだれこんだ所以を考察する。

谷川健一は、本号に評論「柳田国男の「序文」」を寄せる。表題のとおり、柳田の著作の序文を「彼の書物を移す批評の鏡」として読み解く。谷川もまた左翼総会屋雑誌の常連となった民俗学者である。『現代の眼』（1972・1）の総特集「昭和思想—過渡期人物論による試み—」では、後藤と谷川が「柳田国男と折口信夫」というテーマで対談を行っている。

花井純一郎「日本の山人の歌による交

響曲—柳田国男の思想への愚注」は、フーコーを参照しつつ『山の人生』における精神錯乱の主題にアプローチし、物狂いが「山の神」との出あいを媒介としてある意味体系のうちにあみこまれてゆく過程に、柳田の世界了解の方法の独異性を見る。

藤枝元「〈幻の国家〉をめぐる—柳田国男試論」と田中基「国内亡命族虚報—霊媒の学・柳田国男の自己と国家発生との解体」は、いずれも若い世代の柳田論。緑川登は巻末の「編集室の窓」で「本号掲載の藤枝元の論攻及び構文になお難があるにしても『国内亡命族虚報』はその萌芽として若き学究の今後の精進を期待したい」と書いているが、藤枝論文と田中論文を混同しているようである。

本号より河野信子の連載「『言語にとって美とはなにか』の構造」が始まっている（18号まで→『日本思想家文庫1・吉本隆明論』母岩社、1973・3）。表題のとおり、吉本隆明の通称『言語美』を精読する評論である。

本号掲載の詩は二編。書評「読書案内」では、松本健一が村上一郎『草莽論』を、山中智恵子が阿久根靖夫『夢かぞへ』を評する。

■17号（1972年12月、副題「文学と思想」）

特集は「ドストエフスキー・神と死と革命と」。巻頭には連合赤軍事件とドストエフスキー世界との重なりを示唆す

る滝沢克己『ドストエフスキーと現代』（三一書房）の一部が抄録されている。これに続くのは、神学者・高尾利数の論文「ドストエフスキーの宗教性」。イワン・カラマゾフにおける「神」と「キリスト教」の問題を、彼に固有の「共苦」の生きざまを辿りつつ論ずる。キルケゴール研究で知られる飯島宗享の「近代の超克と地下生活者—滝沢克己著『ドストエフスキーと現代』を機縁に」は、大学闘争の過程における闘争主体の形成という視座に立った前掲書を取り上げ、滝沢のドストエフスキーの地下生活者についての解釈に「人間一般の普遍的存在状況の近代的形姿」を見出す。『同時代』の同人でありロシア文学研究者である工藤正広「「白痴」の系譜試論—「白痴」から「ドクトル・ジヴァゴ」のために」は、パステルナークを参照しつつムシュイキン公爵の「夢想」を論ずる。この特集を機に清水正による連載「ドストエフスキー体験記述」（19号まで→『ドストエフスキー体験記述』アルカディア書房、1974・5）も開始された。

特集にあわせて、秋山駿・内村剛介・菊地昌典・松本健一による座談会「日本人にとってドストエフスキーとはなにか」が組まれている。ロシアの土壌を参照する内村や菊地に対し、秋山はそうした文脈をこえて、日本人がドストエフスキーを特に読んだ由来をその作品が「人間の

全部のことを考える、そういうものを考えることばを与えてくれている」ところに見てとり、松本は「ナロード」と「草莽」あるいは「常民」とを比較する視点を打ち出す。これらの論文・座談会とともに、ロシア文学研究者の木下豊房による「ソ連における研究・批評の変遷—三〇年代以降～七一年（生誕百五十周年）まで」と、近田友一による年譜が付されている。

■ 18号（1973年2月、副題「文学と思想」）

特集は「日本革命者の原像・吉田松陰」。同時代には、奈良本辰也・橋川文三・杉浦明平によるシンポジウムの記録『批評日本史 政治の人間の系譜6吉田松陰』（思索社、1971・2）が刊行されるなど、松蔭ブームが到来していた。かつて独立回復期に民族の問題が浮上するなかで、奈良本の『吉田松陰』（岩波新書、1951・1）が松蔭に脚光を浴びせて以来、戦後二度目のブームである。三島由紀夫の死がこれを勢いづけたと考えられよう。巻頭には、鹿野正直と後藤総一郎による対談「吉田松陰の思想的過程」が配されている。丸山眞男の「忠誠」概念を参照しつつ、両者の話題は松蔭の「狂」の道、実学との関係、死の観念と表裏一体になったヒューマニズムについて検討が加えられる。

網沢満昭「吉田松陰と宇都宮黙霖—志士の心情倫理と思想的屈折」（→『日本

近代と民俗的原質』風媒社、1976・5）は、伝記的事実に即しつつ標記二者の出会いを取り上げ、両者の対立を通して幕末期における思想の屈折過程を描出する。池田論「革命家・吉田松陰の実践と思想—伝統的革命思想の創出」は、松陰の革命思想と尊皇思想を腑分けし、前者をその時代認識との結びつきにおいて検証する。日本農本主義の研究者として知られる綱沢、松陰研究家の池田は、いずれも『思想の科学』の出身である。郷土史家の脇英夫「吉田松陰の虚像と実像」は、徳富蘇峰、国木田独歩にはじまった明治期の松陰評価に見られる「革命的志士像」と、実際の彼自身の落差を炙り出す。脇はもう一編の「萩の乱と松蔭一族」では、萩の乱に参加した松陰近親者を紹介している。

阿久根靖夫「働哭無盡—松陰詩瞥見」（2回、19号まで）は、『未焚稿』から『長崎紀行』、『幽因録』に至る松陰の詩を読み解く。この他に、『吉田松陰全集』（大和書房）の第三巻・七巻の内容を紹介する栗原泉の一文と、編集部作成による年譜が掲載されている。

本号より内村剛介をホストとする連載対談がはじまっている。初回「文学者と裏切り」のゲストは竹内好。ロシア文学におけるソロヴィヨフの重要性、吉本隆明の「けんかの売り方」の悪しき日本的土着性、日中国交正常化の問題など、

話題は多岐にわたる。

本号には、『ピエロタ』にしては珍しく小説作品が掲載されている。矢島輝夫「幻日」である。矢島は内村剛介と同じく『試行』に加わっており、母岩社から詩集『受難曲』を出版した詩人でもあった。本号掲載の詩は二編。佃学と北川透の作品である。

■19号（1973年2月、副題「文学と思想」）

特集は「日本浪漫派・イロニーの論理」。橋川文三『日本浪漫派批判序説』（未來社、1960・1）以来の日本浪漫派再評価の動向を受けた特集であり、これを踏まえつつ専ら保田與重郎を対象とした議論が展開されている。

饗庭孝男「保田与重郎論—最後の人と終末の意識」（→『表現者の夢』冬樹社、1973・10）は、日本浪漫派の成立を昭和十年代における中間層の抑圧感覚に対応するものとして捉えた橋川の認識の正しさを認めながら、人間における「自然」との連関の回復や「時間」の直線的連続性の否定を説いた保田の言葉が、橋川が言うようなコンテクストを超えた一般論としてリアリティをもちえたことにその「独創」を見出す。野島秀勝「イロニーの彼方—保田與重郎とドイツ・ロマン派」（→『終末からの序章』北栄社、1980・2）は、保田の初期批評「ルツインデの反抗と僕のなかの群衆」に注

目し、シュレーゲルのイロニー定義を啓示として受け止めた保田が、急速にイロニーの精神を衰弱させ、硬直した皇国史観へと傾斜する過程を辿る。

三枝康高「保田与重郎と川端康成一浪漫的受難者の出会い」（→『昭和文学史の論点』桜楓社、1975・8）は、『日本浪漫派』創刊前後の保田と川端の相互に対する言及を辿り、川端が「末期の眼」をもって見た人間のドラマを保田が「イロニー」と捉えたところに注目する。緑川登の後記によれば、このほか研究者からは大久保典夫が執筆を予定していたが、体調不良で原稿を落としている。

伊谷隆一「〈過激ロマンチズム〉の終末と現在」は、日本武尊をうたう与謝野鉄幹の史詩「哀歌」から説き起こし、同じく『戴冠詩人の御一人者』で日本武尊を語る保田には鉄幹の「焦燥」が見られないところに、「保田のイロニーの世界の構造」を透かし見る。

後期『ピエロタ』に村上一郎の存在が影を落としていることはすでに見たが、本号にはその村上が「日本浪漫派覚え書」（→『イアリンの歌』国文社、1974・3）を寄稿した。学生時代より作歌をなし、『日本歌人』への参加を望んだものの、その休刊を前川佐美雄より知らされたという村上は、日本浪漫派との結び目を断たれる一方で、高島善哉に学ぶ「市民社会青年」であった。村上はこの

うした学生時代、さらには戦後の日本浪漫派体験を振り返りながら、日本浪漫派のいう「皇神の道統」を、西欧の哲学者たちが市民社会批判の文脈で仮設した「自然状態」と比較して論ずる。

松本健一「散華の美学—保田与重郎私見」（→『革命的ロマン主義の位相』前掲）は、保田与重郎の「生の代価としてのロマンに賭ける試み」と梅崎春生の「生きざまの真実を旗印とする試み」を同じデカダンスを出自にもつ「双生児」として論じ、松本自身を含む「戦無派」世代のイデオロギー不信、理念不在のデカダンスが、彼らをして保田の「武器としてのイロニー」を欲せしめていると説く。後藤総一郎「浪漫派少年の原図—橋川文三・その『日本浪漫派批判序説』の源流」は、橋川の教え子のひとりである著者が、保田に親炙した橋川の来歴を、橋川自身の回想をひもときながら検証する。本格的な橋川論の嚆矢というべき一篇であり、その没後に後藤らが加わった『思想の科学』の特集「橋川文三研究」（1984・6）に先鞭をつけたと言えよう。なお、本稿は末尾に未完と記されているが、続編の掲載には至っていない。

鈴村和成「浪漫派的断想」は、あえて旧かなで書かれた、保田与重郎のパステイッシュと読まれうる随想である。鈴村は『白鯨』では伊藤静雄論に取り組んだ詩人だが、『ピエロタ』に執筆した

『白鯨』の出身者としては、他に倉橋健一、藤井貞和、佐々木幹郎の名が挙げられる。特集の続きには、吉増剛造の散文詩「木霊ノート」が掲載されている。本号の特集にあわせて書かれたとも推測されるこの詩は、日本浪漫派的なものに対する吉増からの応答として読まれる。

内村剛介による連続対談二回目のゲストは河野信子、テーマは「『共同幻想論』の意味」。内村は吉本のいわゆる「幻想」の概念がマスメディアを通して陳腐化する状況を批判し、河野はこれをあくまでも「関係」の論理として捉えるべきことを強調する。

本号より「アジア主義思想の系譜」と題する評論シリーズが始まるが、母岩社が次号で本誌から離れたため、二回に終わる。第一回は滝村隆一「北一輝〈支那政策〉の構想とその批判」（→『北一輝—日本の国家社会主義』勁草書房、1973・5）。主に『支那革命外史』に即して、北の支那政策が支那保全主義の理念を裏切る不徹底なものであったこと、それゆえ軍事的封建的イデオロギーの尖兵となったことを指摘する。網沢満昭の新連載「権藤成卿論」（→『農本主義と天皇制』イザラ書房、1974・10）も次号で中断。権藤の「社稷」理念と柳田国男の「常民」とを、ともに国家の論理を拒絶する思想的追究の所産と捉え、『自治民範』を中心とする権藤のテキストから明

治以降の国体論への嘲笑、「すべての権力からの自立をめざす志向」を別袂する。

■20号（1973年6月、副題「文学と思想」）

巻頭の目次裏には、会田綱雄の詩「ピエロタでは」が掲げられている。母岩社から『ピエロタ』が刊行されるのは、本号をもって終わる。特集は「思想史としての島崎藤村の文学」。冒頭に配された芳賀登・後藤総一郎の対談「『夜明け前』と幕末草莽の国学思想」が示すように、この特集では、本誌がこれまで展開してきたような土着思想・ナショナリズム思想の再検討という文脈において藤村の文学を捉え直すことが志向されている。芳賀は幕末国学の研究者としての視点から、『夜明け前』における国学の問題を、信州における平田門の分布状況と照らして考察する。芳賀は後年、『夜明け前』の虚像と実像（教育出版センター、1984・3）を上梓、より精緻な検証を展開している。

柴田道子「『破戒』をめぐって—欠落した部落民の立場」は、『被差別部落の伝承と生活—信州の部落・古老聞き書き』（三一書房、1972・1）の著者が、かつて聞きとりを行なった信州の被差別部落の古老たちが藤村あるいは『破戒』を「カタキ」と呼んでいたことを振り返り、その所以を問う。河野信子「『春』—その近代的恋愛思想の夜明けと挫折」は、透谷「厭世詩家と女性」と透谷『春』と

の関係を再検討し、「人間性を呪縛してやまぬ共同性の絆」を作品に即して論ずる。岡田啓「〈家〉＝〈性〉の永遠なる闇—『家』における藤村の自己表出の根源をめぐって」は、藤村をして「書く」ことのはじまりに立たせた作品として『家』を位置付ける。

シリーズ「アジア主義思想の系譜」第二回は木下長宏「岡倉天心—幻視のアジア」。東京美術学校で日本美術史の講義をはじめて以来の天心の動向を辿り、近代への抗議としてのアジアを幻視した天心の「美の理想」について考察する。

本号では新たに二編の論考の連載がスタートしているが、掲載は今号のみとなった。一編目は、松本健一「憑かれた人びとの群—日本近代文学とドストエフスキ」。ここではドストエフスキの受容を通して近代日本の精神しを追跡するという眼目が示され、二葉亭四迷と内田魯庵のドストエフスキ受容が検討されている。松本はすでに修士論文として、この論文のもとになる論考を含むドストエフスキ受容論を執筆していたという⁵⁶。その後、戦後派までを対象とした『ドストエフスキと日本人』（前掲）が刊行されており、その序章は今号掲載論文を改稿したものである。

新連載二編目は、高内壮介「湯川秀樹

論」である。湯川の量子力学を検証しつつ、連想は岡潔の数学、武満徹の音楽や岡崎清一郎の詩に及び、その「同定理論」を独自の認識論、あるいは主体性論として読み換える。続編は、松岡正剛が編集する雑誌『遊』（工作舎）に連載の場を移した。いわゆる「ニューアカデミズム」の発生源のひとつとして知られる雑誌である。さらに一連の論考は『湯川秀樹論』（工作舎、1974・6）として刊行され、湯川秀樹その人が序文を寄せた。湯川はここに「本書の著者、高内壮介氏は私にとって、まったく未知の人であった。ところが本文のゲラ刷りを一読して、高内氏の方は意外によく私の心の内面まで見透しておられるのに驚いた」⁵⁷と書いている。

本号には、本誌初期を支えた江森国友の他に、山口ひとよ、鈴木和成の詩が掲載されている。また、本号の最後に置かれているのは、戦後のガリ版雑誌『花』に掲載された作品と、上林猷夫によるその回想。かつて「詩と芸術」の雑誌であった頃の『ピエロタ』を思い起こさせる記事である。ここでは池田克己を中心とした詩誌『花』の作品が抄録され、戦前からの詩人同士のつながり、創刊後の山内義雄や豊島与志雄による支援、高見順の参加といった動向が、上林によって証言されている。

56 松本健一「あとがき」（『ドストエフスキと日本人』前掲、251-2頁）。

57 湯川秀樹「序文 私が歩んできた道」（高内壮介『湯川秀樹論』前掲、2頁）。

■ 21号（1974年6月、副題なし）

前号の刊行から一年を経て、本号から『ピエロタ』は版元を吟遊社に移し、季刊誌として再出発した。編集後記では、緑川登が「主にその経済的な行き詰りから休刊の止むなきに至」ったことを明らかにし、「今般、吟遊社北村博氏の好意によって復刊されることとなりましたが、私の編集に関わる小誌は本号を以て終わり、今後は若い同氏らの知恵とエネルギーとによって斬新な企画が進められることと信じます」と書いている。

本号の総特集は「北一輝・その人と思想」。冒頭には、いいだ・ももの論文「北一輝と〈大衆の叛乱〉の時代」（→『ふるい鳩舎の熱い糞のように』出帆社、1976・6）が配されている。いいだはここで、ジョージ・M・ウィルソン『北一輝と日本の近代』（岡本幸治訳、勁草書房、1971・12）が提起した「近代化推進者としての北一輝」という視座について再検討し、北が出現した背景に、講座派的マルクス主義者と日本浪漫派のファシストが通底してしまうという日本の歴史的条件を見出す。木下長宏「詩人輝次郎の転位—北一輝の方法序説」は、職業革命家へと転じた二十四歳の北に詩への関心の放棄を看取し、北がその放棄によってかえって近代日本の詩の根底的な問題に楔を打ち込んだと論ずる。伊谷隆一「憤怒としての浪漫のゆくたて—北一輝ノオ

ト」は、徳富蘆花をとらえた維新革命の挫折を継承した思想家として北を位置づけ、民衆と国家の原像に己を奔流させた情熱が彼自身を裏切ったと指摘する。

おはら・かずひさ（尾原和久）「〈死ノ叫声〉の史的意義—朝日平吾と北一輝の出会い」は、大正期の青年たちの時代への危機意識に着目し、朝日における「赤子観念」へのひたむきな傾斜に北一輝を重ねつつ、朝日と天皇制に冷めた眼を持ち続けた北との差異を指摘する。近藤秀樹「青年北輝次郎の墮落」は、社会主義と帝国主義との架橋という問題を北の思想の核心に置き、両者を架橋しえたという北の自認を『国体論及び純正社会主義』に看取する。田村芳朗「北一輝と法華経」は、仏教学者の立場から北の法華経受容のありかたを探り、北が日本を絶対化するところに日蓮思想との差異を見る。

特集のための対談は、松本健一・今井清一の「天皇制ファシズムと北一輝」。松本は北をあくまでも個人至上主義者であるがゆえに天皇制ファシストとは異質な存在として捉え、今井も現実の帝国主義支配者に対する批判者としての側面に関心を寄せている。特集の最後には北の年譜・語録と、北に関する久野収、橋川文三の既発表論文を資料として収める。さらに、後藤総一郎「個性的な北一輝発掘・照明作業」（→『天皇神学の形成と批判』イザラ書房、1975・9）が北に関する研究

状況を、この二編を含めて展望している。

■ 22号（1974年10月、副題なし）

本号の総特集は「人間・大杉栄の思想」。冒頭に配されているのは、秋山清・大久保典夫・大沢正道による座談会「人間・大杉栄の全体像」である。従来の文学史が、雑誌『近代思想』などを通じて文壇に接近していたはずの大杉栄を見落としてきたことを大久保が指摘すると、秋山は、平野謙・勝本清一郎・中野重治・猪野謙二の「座談会・近代日本文学史」（『文学』1963・9）でも大杉の扱いが杜撰であることを指摘し、大正文壇における大杉の存在感に注目を促す。ここで問題とされているのは、マルクス主義、プロレタリア文学だけが「左翼の文学」として認知されてきたことの誤りである。さらに大沢はアナキズム研究の視点から、大杉がいったんはクロボトキンから離れたことに注目し、『近代思想』の背景に明治の社会主義の挫折体験があることを指摘している。また、大杉を市民運動の先行者としての評価する視点もあわせて打ち出されている。

続いて、いわゆる「日蔭茶屋事件」で知られる神近市子へのインタビュー「人間であることの戦い」が掲載されている。宮嶋資夫の妻麗子を介してアナキズムに接近した頃、ロシア革命の衝撃、堺利彦の売文社に出入りした頃、エロ

シェンコとの交友、大杉のことなど、過去のアナキズム体験を語る。

続いて本誌には、この座談会で主に大久保が言及した論文・エッセイが再録されているが、多くが既発表のものゝ転載である。特集のための書き下ろしが、大島英三郎の「黒旗から怒りをこめて—アツピール」というアジビラ風の一文と、杉浦勢之のコラム（「甲羅無」）のほかはないことが、雑誌としての行き詰まりを示していよう。これらの書誌については、本誌前号掲載の『ピエロタ』総目次を参照されたい⁵⁸。滝沢叔一による相沢尚夫他著『日本無政府共産党』（海燕書房）1974の書評も、対象の選択を含めていかにもアジビラめいており、従来の『ピエロタ』の読者を当惑させたものと思われる。

■ 23号（1975年4月、副題なし）

表紙に「終刊号」との記載があるが、本号には編集後記も奥付もない。総特集は「三島由紀夫の猛挙」。冒頭には三島の死を織り込んだ飯島耕一の詩「川と河」が転載されている。続けて「発言」と題して、大久保典夫・石堂淑郎・小川徹・丸山邦男の四者によるシンポジウムもしくは講演の記録（開催は1974年

58 先の総目次（『神戸大学文学部紀要』2020・3）では抜けているが、曾田秀彦「大杉栄とロマン・ロラン—「憎悪」と「調和」の美学」は、『文芸研究』（明治大学文学部、1974・3）からの転載である。

11月25日か）が掲載されている。冒頭、大久保は三島の創作活動をおおまかに辿り、この作家を鏡花、谷崎、遡って大蘇芳年や草双紙風なもの系列に置く視点の重要性を強調する。石堂は、映画「からっ風野郎」を監督した増村保造が、三島の文学について「運動神経の無さを補う為に、そこから過剰に〈フォルム〉という意識が出て来ている」と語っていたこと、また三島が加藤泰のヤクザ映画作品を絶賛していたことを紹介する。

小川は、花田清輝と三島が「同じ性格を持っている」と述べ、『仮面の告白』以来の三島に花田が語ったような「インパーソナル」なもの、「人は物である、というような考え方」を見出す。丸山は、戦時は神格的存在だった天皇が戦後は人間化されたという認識は実は戦後につくられた天皇神話であり、戦時に政治的な判断を下していた人間天皇が、戦後にむしろ過去の責任に関して一言も口にしない生き神様になったのではないかと指摘、三島もこの「象徴天皇制神話」にだまされたのではないかと問う。

書き下ろしの論文は二篇。芦原修二「過ぎにし時に求めた幻影—三島由紀夫の肉体思想」は、太宰と三島の比較に始

まり、三島の文学的な思想性は政治的な有効性をもたないという指摘をもって結論とする。山崎行太郎「存在論の人間—三島由紀夫私論」は、三島が語った状況認識や政治思想の外延の意味よりも、何ものかを待つことによってしか生きることのできなかった三島の「存在」の不幸を重視し、実存の不安から逃避するあらゆる行為が「気晴らし」に過ぎないことをよく知っていた三島を「存在論的人間」として把握する。

岳真也のコラム（「甲羅無」）は『仮面の告白』を再読した著者の感想文。これに続けて掲載されたのは、いずれも既発表原稿の再録である。巻末には、杉浦勢之による岡庭昇『偏執論』の書評が載った。山崎行太郎と杉浦勢之は、翌76年2月に新たに創刊された『ピエロタ』の同人となる若手批評家であった。

かつて博士論文の執筆に取り組んでいたころ、まるで雑多なスクラップ集のようなこの三島由紀夫特集号を東京荻窪のささま書店で入手したことが、本誌の調査を思い立つ最初のきっかけとなった。最後に私事ながら、このことを付記しておきたい。

3 『ピエロタ』執筆者一覧

以下に本誌の執筆者（外国語のテキストの翻訳者、座談会・インタビューの発言者、イラスト・写真等図像の作者を含む）を示す。数字は掲載号数。なお、母岩社からの刊行物を有する執筆者については、確認できた限りでその書名等と出版年を併記する。

[あ]	安藤典明…………… 14	伊藤信吉…3、4、5、6、8、12
会田千衣子…………… 1、6	飯島耕一…………… 23	伊東守男…………… 11
会田綱雄…………… 3、4、5、11	飯島宗享…………… 17	伊藤章雄…………… 14
『汝』1970	いいだ・もも…………… 21	稲垣とし子…………… 10
『会田綱雄詩集』1972	飯村隆彦…………… 8	茨木のり子…………… 1
饗庭孝男…………… 19	池田諭…………… 18	今井清一…………… 21
赤塚行雄…………… 4、8、11、12	石垣りん…………… 1、9	岩城之徳…………… 12
秋山清…………… 4、12、14、22	石川逸子…………… 12	ヴァイノクーロフ、エフゲニー …… 2
秋山駿…………… 17	石川雅…………… 6	ウィリアムズ、ウィリアム・カーロス… 3
阿久根靖夫… 12、14、18、	石川正夫…………… 23	上杉浩子…………… 2
19、20	石堂淑郎…………… 23	『魔界』1979
芦原修二…………… 35	石原和夫…………… 5	宇佐見英治…………… 1、3、11
安宅啓子…………… 10	石原吉郎…………… 2、10、11	内村剛介…………… 2、3、5、14、
『大祈禱書』1973	磯田光一…………… 23	15、17、18、19、20
安宅夏夫…………… 8、9、11、14	伊谷隆一…………… 19、21	梅田智江…………… 9
『火の舞踏』1972	市川雅…………… 6、10	浦島ふみ子…………… 1、2
天沢退二郎…………… 4	一羽昌子…………… 6	江口幹…………… 8
荒畑寒村…………… 22	伊藤聚…………… 12	江森国友… 1、2、3、4、5、
粟津則雄…………… 2、13	伊藤幹治…………… 20	6、8、9、10、12、14、20
安西均…………… 5	伊東きよ子…………… 1	『宝篋と花讃』1971

エリュアール, ポール… 1	[か]	工藤正広…………… 17
エルンスト, マックス… 2	鍵谷幸信…………… 2、3、11	久野収…………… 21
遠藤太郎…………… 1	岳真也…………… 23	熊倉正雄…………… 12
及川均…………… 9、12	加治邦子…………… 6	倉橋健…………… 10
おおえまさのり…………… 3	加藤郁乎…………… 8	栗原泉…………… 17、18
オーデン, W・H…………… 4	加藤千恵…………… 1	黒田三郎…………… 1、11
大森久礼…………… 3	金井直…………… 2	黒部節子…………… 11
大久保典夫…………… 22、23	金石稔…………… 10、12	小出真理…………… 9
大沢正道…………… 22	『天獄』1971	河野信子…………… 13、16、17、
大島英三郎…………… 22	金子光晴…………… 1、2、3	18、19、20
大島渚…………… 23	鹿野政直…………… 18	『吉本隆明論』1973
岡崎清一郎…………… 1、3	神近市子…………… 22	河野芳夫…………… 8
岡田啓…………… 18、20	川上二郎…………… 6	高良留美子…………… 3
岡田信次…………… 11	川口澄子…………… 1	後藤総一郎… 16、18、19、
岡田隆彦…………… 4	川本三郎…………… 19、20	20、21
岡庭昇…………… 13	唐十郎…………… 5	小松郁子…………… 2、5
小川和佑…………… 13	菅孝行…………… 13	小柳玲子…………… 10
小川徹…………… 23	上林猷夫…………… 20	近藤秀樹…………… 21
岡本雅美…………… 2	菊地昌典…………… 17	[さ]
奥村チヨ…………… 2	木下豊房…………… 17	斎田朋雄…………… 11
桶谷秀昭…………… 14、15	木下長宏…………… 20、21	三枝康高…………… 19
尾崎士郎…………… 22	北川透…………… 15、18	桜井滋人…………… 3、5
尾崎秀樹…………… 20	木村昌博…………… 14	佐々木幹郎…………… 8
小沢俊郎…………… 10	草鹿外吉…………… 12	佐佐木幸綱…………… 12
おはら・かずひさ…………… 21	草野心平… 1、3、4、5、6、	サトウ・サナエ…………… 9
尾山敏明…………… 5	8、10、11	里信直枝…………… 4
	楠野裕治…………… 6、8、11	猿田長春…………… 5

沢田哲郎…………… 6	鈴木和成…………… 19、20	滝村隆一…………… 19
澤村光博…………… 10、15	須田浅一郎…………… 10	竹内好…………… 18
柴田成人…………… 8	『生きるということ』1970	武田文章…………… 1
柴田道子…………… 20	千先泰子…………… 10	多田智満子…………… 6
芝山幹郎…………… 12、13	宗左近…………… 8	田中基…………… 16
渋沢孝輔…………… 9	『幻花—死その透明と その旅とその花と』1972	谷川健一…………… 16
嶋岡農…………… 1、2、3、4、5、 6、8、9、10、11、12	曾田秀彦…………… 22	玉置正敏…………… 5
しまね・きよし…………… 12	〔た〕	田村雅之…………… 20
清水正…………… 17、18、19	高内壮介…………… 3、6、10、13、 14、15、16、17、18、19、20	田村芳朗…………… 21
清水哲男…………… 12	『暴力のロゴス—科学の ディアローグ』1973	田村隆一…………… 1、3、4
清水俊彦…………… 3	高尾利数…………… 17	近田友一…………… 17
ジュネ、ジャン…………… 6	高野喜久雄…………… 5	知念栄喜…………… 2、5、6、12
城侑…………… 12	高橋秀一郎…………… 9	長光太…………… 3、9
白石かずこ…………… 2、3	高橋徹…………… 17	塚本邦雄…………… 8
白川正芳…………… 13、14	高橋安子…………… 4、14、15、16、 17、18、19	佃学…………… 13、14、18
ジルムンスカヤ・タマラ… 2	高柳重信…………… 19	『劇中劇』1973
新川和江…………… 5	『高柳重信全句集』1972	辻まこと…………… 1
新納みつる…………… 1	財部鳥子…………… 1、3、4、5、6、 8、9、11、15	辻まこと…………… 18、19、20
新谷行…………… 3、5	『愛語』1972	鶴岡善久…………… 5、9
新藤凉子…………… 3	瀧口修造…………… 5、9	寺門仁…………… 5
菅原克己…………… 9	滝口雅子…………… 2、3	遠丸立…………… 8
菅原孝雄…………… 18	滝沢俣一…………… 22	登川直樹…………… 1
杉浦勢之…………… 22、23		徳永民平…………… 2、11
杉村篤…………… 6		戸田正寿…………… 5
杉本春生…………… 14、15		刀根…………… 10、13
鈴木はるみ…………… 7		とはらこと…………… 4
		豊島弘尚…………… 4

鳥越竜雄……………	1、2	馬場彬……………	4	北條裕子……………	6、10
鳥見迅彦……………	1	原梢……………	2	『形象』1971	
[な]		原精一……………	3	星野徹……………	11、15
中武久……………	11	判沢弘……………	14、15	本郷隆……………	5、6、8
中川タマキ……………	3	東原徹……………	2	[ま]	
中桐雅夫……………	4	日高てる……………	1、3、9	前川佳子……………	1、2、3、4
永島卓……………	11	日夏堇路……………	4	マッソン、アンドレ……………	8
中崎一夫……………	11	日原正彦……………	8	松浦玲……………	14
中野嘉一……………	11	日向あき子……………	1	松岡修二……………	16
仲程昌徳……………	16	平岡敏夫……………	15	真継伸彦……………	23
奈良原一高……………	1、2	平間文子……………	8	松永伍一……………	11
橋原祐……………	3、4、5	福井久子……………	4、5	松本健一……………	14、15、16、17、
西野勉……………	9、11	福多久……………	10、11	19、20、21	
西脇順三郎……………	3、11	『SOKON 草婚』1970		マトヴェワ、ノヴェラ……………	5
野海青児……………	10	福地靖……………	11、13、14	マルコワ、ヴェラー……………	12
野島秀勝……………	19	福地康之……………	10	丸山邦男……………	23
延原時行……………	13	福島晶子……………	1	三木卓……………	2、3
[は]		福島章……………	12	御沢昌弘……………	11
芳賀登……………	20	藤井貞和……………	8	三井葉子……………	10
橋川文三……………	16、21	藤枝元……………	16	三島由紀夫……………	23
橋本真理……………	13、15	藤岡武雄……………	12	蜜波羅伸三……………	10
長谷川義記……………	14	藤富保男……………	8	南美穂子……………	14
花井純一郎……………	8、10、11、13、	藤松博……………	1、2	緑川登……………	21
16		富士原清一……………	9	宮岡頌子……………	10
『祝祭空間』1972		ブルトン、アンドレ……………	5	宮田恭子……………	5
羽永光利……………	4、5、6、10	ブレイク、ウィリアム……………	4	宮田登……………	19
花田英三……………	5、6	古沢岩美……………	3	三好敏弘……………	4

三好豊一郎……………	1、14	山田賢二……………	10	渡辺みえこ……………	5
村上一郎……………	19、23	山田達雄……………	10		
村上善男……………	9	山中智恵子……………	16		
村井志摩子……………	4	山中散生……………	11		
村田正夫……………	11	山村信男……………	12		
村野四郎……………	11	山本太郎……………	1、6		
村松武司……………	4	山本哲也……………	15		
奈田瑛二……………	11	『連禱騒々』1972			
守靖男……………	6	横川礼子……………	4、11		
森山重雄……………	22	吉岡弘昭……………	11		
[や]		吉沢脩……………	10		
八木義之介……………	3	ヨシダ・ヨシエ…	2、3、5、		
矢島輝夫……………	18	6、7			
『受難曲』1973		美栄関……………	11		
矢島雅彦……………	11	吉野弘……………	2		
ヤーシン, アレクサンドル…	5	吉原幸子……………	1		
安岡明夫……………	5	吉増剛造……………	1、19		
安地美禎……………	17	吉行理恵……………	1		
安水稔和……………	4	依田邦子……………	8		
山口ひとよ……………	20	[ら]			
『薔薇贄』1972		ライト, ハロルド……………	2		
『シオンの夏』1975		ルドン, オディロン……………	2		
山口三夫……………	1、2	レトキ, セオドー……………	8		
山口義郎……………	4	[わ]			
山崎行太郎……………	23	脇英夫……………	18		
山下菊二……………	5	ワシオ・トシヒコ…	12、13		
山田今次……………	14	渡辺広士……………	12		